

SVP東京20周年記念ブック



SVP TOKYO 20TH ANNIVERSARY BOOK



SVP TOKYO 20TH ANNIVERSARY BOOK

2024年11月 発行

特定非営利活動法人ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京

<https://svptokyo.org/>
<https://www.socialventurepartners.org/>



SVP東京20年の歩みと価値を振り返り、 これからの10年を考える

SVP東京はいったいどれだけのインパクトを社会に生みだしてきたのか？

私たちSVP東京が毎年、投資・協働先団体を選考する際には、それぞれの団体に期待できるインパクトを詰めて議論し、協働が始まってからは実際にインパクトを創り出すべく、一緒に汗をかいてきました。2005年に最初の投資先を選んで以来、累計69団体（2023年末時点）と協働し、各団体が社会にもたらしてきた価値は、誇るべきものがあると感じます。

一方、SVP東京自体が生みだす価値はどれほどなのかという点は、会議の場でも酒席でもしばしば議論してきましたが、見える化する努力を先送りしたまま、20周年に至ったように思います。

協働を通じた社会的インパクトとパートナーの成長という、SVP東京が掲げるふたつのミッションを軸に、20周年記念冊子を企画・編集しました。歴代の協働先累計69団体とつながり直し、400人を超える歴代のパートナーとつながり直し、これから10年を考えるための基盤、新たな発想の源としたいと考えます。

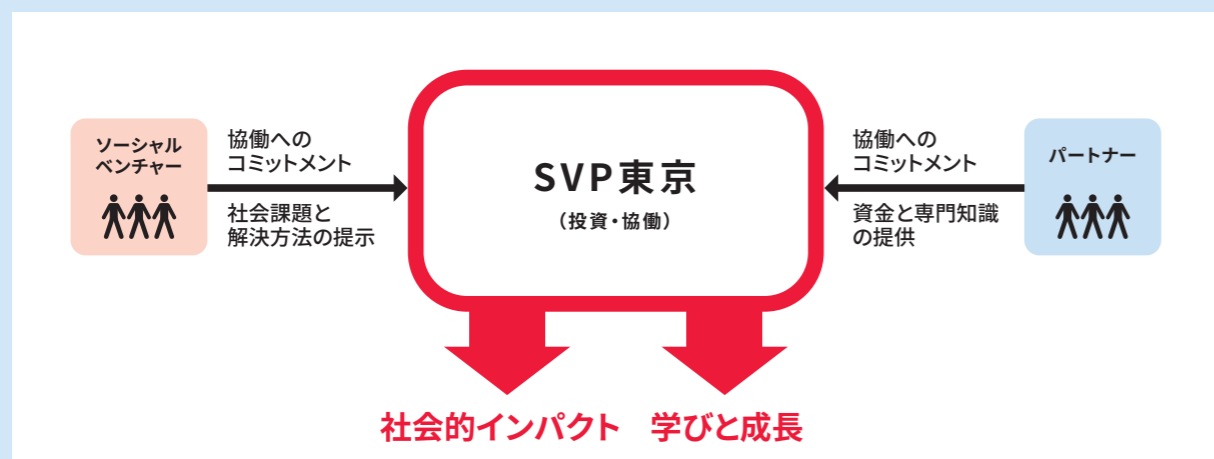
CONTENTS

- Message 1
- SVP東京とは 2
- 数字で見るSVP東京 3
- SVP Tokyo 20yrs History 4
- 投資・協働先&パートナー 20周年アンケート 調査結果 10
 - 調査概要と回答者の属性
 - 事業規模で見る協働先の成長 12
 - スタッフ数で見る協働先の成長 14
 - 団体にとっての協働の価値 15
 - 協働終了後のパートナーとの関係性 19
 - パートナー自身への影響 20
- 20th Kick Off Photo Album 22
- SVP東京 20年の価値 株式会社風とつばさ 水谷衣里 24
- 20年を超えて、未来へ -今後、SVP東京に期待すること- 26
- 20周年特設サイトご紹介 / Special Thanks 28
- 編集後記 29
- 投資・協働先団体 一覧 30

SHIBUYA FONT® タイトルフォントに2021年に採択した協働先団体・シブヤフォントを採用しています。

SVP東京とは

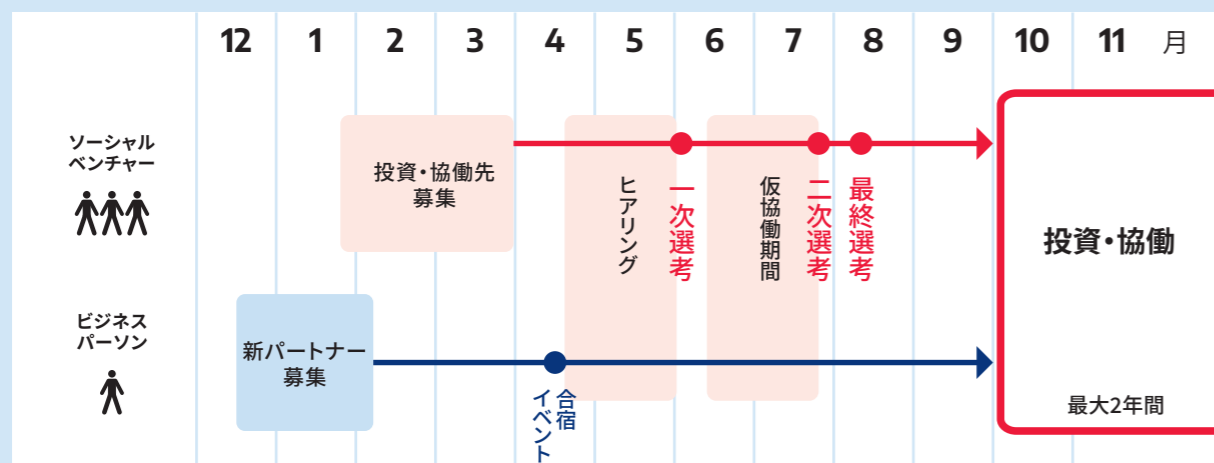
NPO法人ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京(SVP東京)は、社会課題の解決に取り組む革新的な事業に対して、資金提供とパートナーによる経営支援を行っています。
「パートナー」と呼ぶビジネスパーソン約100名が年会費10万円を拠出、それを原資として、NPO法人やソーシャルビジネスを行う組織など法人格を問わず、応募団体を年1回募集。数か月かけた選考を経て毎年3~5団体を選び、最大100万円×2年間の資金拠出(投資)と、パートナー個々の専門性や情熱を反映した経営支援(協働)を続けてきました。



2つのミッション

投資・協働を通じて、団体の基盤強化や事業開発を進め、社会的インパクトを創出する
投資・協働に取り組むことで、パートナーの学びや成長につながる「道場」とする

投資・協働のプロセス



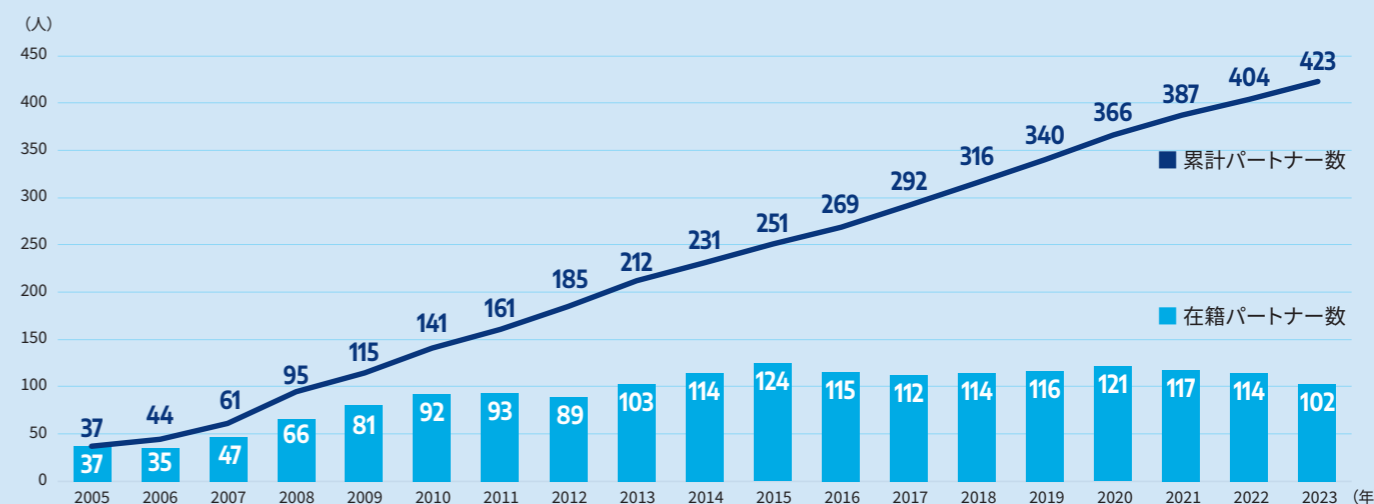
数字で見るSVP TOKYO FY2005-2023

累計 **69** 団体と協働

多文化共生センター東京/フローレンス/バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター/マドレボニータ/ワールドキャンパスインターナショナル/みやじ豚く農家のこせがれネットワーク/イージェイネット/ガイア・イニシアティブ/カタリバ/プラスリジョン/ケアプロ/難民支援協会/コレクティブハウジング社/ブラストビート/コペルニク/きずなメール・プロジェクト/発達わんぱく会/クロスフィールズ/U2plus/ArrowArrow/にわたりの会/ゆにしあ/キズキ/リリムジカ/e-Education/ハナラボ/KARAFURU/ミャンマーファミリー・クリニックと菜園の会/みんなのことは/ぷるすあるは/ReBit/チャリティーサンタ/AsMama/ピリカ/ユアフィールドつくば(つくばアグリチャレンジ)/Coaido/患者スピーカーバンク/スリール/CHAR(モクチン企画)/自立生活サポートセンター・もやい/SEELS/PIECES/3keys/リミー/コークッキング/ピッコラーレ/エイズ孤児支援NGO・PLAS/グッドネイバースカンパニー/エンドオブライフ・ケア協会/WELgee/アクセプト・インターナショナル/デフサポ/ローランズ/サンカクシャ/ピルコン/風テラス/おてつたび/イノP(農家ハンター)/シブヤフォント/mog/ソソリッサ/Robo Co-op/阿波つくよみファーム(経親)/Renovate Japan/アジア人文文化交流促進協会(JII)/家族のためのADR推進協会/第3の家族/テクノツール/メタノイア

投資総額 **1億1,700万円**

歴代パートナー **423人**



SVP TOKYO 20yrs History

東京ソーシャルベンチャーズ 定款第0条

ふつうに大事だと思えるものを、ふつうに大事にできる世の中に

安心して子どもを育てられること、土や水とともに暮らしかること、
歴史を感じ、未来を感じられること、みな笑顔であること、
時間の流れがおだやかであること、人を信じられること —
お金は大事。GDPも大事。ただ、そのためにすべてを犠牲にしたいとは思わない。
世の中の価値を複線的に。複々線的に。そしてそれらの価値が循環するように。
幸せの総和をふくらませたい。

いい目をした個人が増えること

元気な個人が増えること。流されることなく、自分の判断で行動できる個人が
増えること。起業家精神をもった個人が増えること。ポジティブな感化を周囲に
及ぼせるような、いい目をした個人が増えること。
(中略)

思いやりの社会に

自分自身が大事なように、あなたの目の前にいる人も大事なひとにちがいない。
職業や性別、年齢や見かけ、背負っている歴史や、生きている今のちがいを
超えて。少数者への配慮を忘れずに、自分を愛することを忘れずに。
社会がより豊かな多様性を孕むように。

「東京ソーシャルベンチャーズ」という団体名で2005年、パートナーの募集や投資先の募集を
始めた時の「定款第0条」です。この思いは合同会社の定款、NPO法人の定款に受け継がれ、
そして今も、この思いがSVP東京を支えています。

SVP東京のはじまり

2001年9月11日
創業メンバーの井上英之と影山知明がSVPシアトルを訪問する
アポイントを取っていたのは、奇しくもアメリカ同時多発テロ
事件の日でした。当時、年5,000ドルを拠出するパートナーが
400人を超えた、SVPシアトルの物語や背景、仕組みや情熱を現地
で体感し、SVP東京設立へ動き出しました。

● パートナー募集、 約30人が10万円ずつ拠出する 仕組みが開始



パートナー第1号の会員証です。
当初は、会員証を手作りしていました。

2001

2003

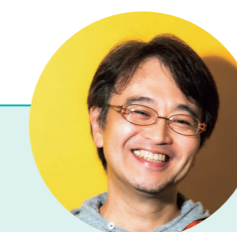
2005

● 創業メンバー3人が100円ずつ出して
ファンドをつくることから任意組合
「エス・ブイ・ピー東京ベイ」として活動開始
後に、投資先募集にあたって、「東京ソーシャルベンチャーズ」(SVT)に改称

● 第1回ネットワークミーティング開催

SVPはなぜ、どうやって誕生したのか？

当時、社会起業の「マーケットプレイス(市場)」を作りたい!と表現していま
した。1人のすごい人が、ヒーローのように実現するのを待つのではなく、
いろんな人の少しずつの気持ちや出来ることが集まり、新しい動きが生ま
れる場。そこには、起業する人もいれば、手伝う人や励ます人、お金を出す人
やメディアになる人もいます。誰かの挑戦やその背景を知って、その場で、共感
していることや出来ることを表明しあえたらと思い、社会を変える、新しい
“たくらみ”の「ブチIPO」の場として始めたのが「ネットワークミーティ
ング」でした。毎月、とにかく、楽しく、一人ひとりを大切に花火を上げよう。そ
こで、SVPのコミュニティが生まれ、また、新しい投資先や、仲間になってくれ
る人を探しました。
(井上英之 創業代表)



● どういう風に決まったのか？

フローレンスの事業はまだ始まっておらず、解決
モデルのアイデアだけの頃でした。議論の場に、
パートナーのTさんが家族連れで来ていたのです
が、応援演説で子どもたちの未来を語り、みんなの
心を動かしたのを覚えています。決まったのは深夜
2時を過ぎていました。
さらに深夜3時過ぎまで議論しましたが持ち越し
となり、翌月の会議で、もう一つの投資先、多文化
共生センター東京が決まりました。
(井上)

従来の投資・協働とは別に、企業の社員がNPOなどと出会うことができる場を創ることに取り組みました。NPOなどの代表を招いてプレゼンしてもらい、社員有志に社会課題の解決に関わってもらう仕組みです。



まず、UBSから資金の拠出に加えて社員の方がリソースとして協働先の力になるうとしてくれたことに発展の可能性を感じて、それを見たアクセントチュア出身のパートナーがアクセントチュアに話を持っていったんです。企業に勤めながらこういう機会があるのはお互いにとっていいよねと。あのプログラムをきっかけにソーシャルベンチャーと出会って、ソーシャルの何たるかを知ったという人がすごく多いです。パートナー企業に与えるインパクトが結構あって、チャレンジできる自由の種をまいて、世の中の流れをひとつ作ったのではないかと思います。
(岡本拓也 2代目代表)

企業向けプログラムは参加企業が増え、手を挙げた社員有志がチームを組んでNPOなどを支援するのをSVP東京が裏方としてサポートする仕組みを作りました。



単純に労働時間を使うという意味でのボランティアを超えたインパクトを社会にもたらすことを構想しました。プロボノという考え方は、企業の新しい社会貢献として認知も広がっていましたが、プロボノによって会社しながら社員が新しいことに主体的に挑戦できる、しかもそれを外部のNPOと協働によって実現するのは、当時としては新しい潮流だったと思います。また、SVPにとっては、自分たちの組織の拡大をしなくてもインパクトを広げられるやり方が見つかった、そしてそれが収益にもつながるという、二つの意味があったと思います。
(藤村隆 事業統括→3代目代表)

2006

● SVP Internationalに加盟



SVPは、1997年にシアトルで誕生して以来、北米の多くの都市で、このモデルを始めたい有志が立ち上げ、各地に展開。現在は、アメリカ、カナダ、日本、中国、韓国、インド、オーストラリアの40都市以上の支部がネットワーク組織のSocial Venture Partners Internationalに加盟。SVP東京が加盟した時点では、北米(アメリカとカナダ)以外で初めての支部だった。

SVP東京の加盟は、SVPIにとっても大きな出来事です。SVPI10周年イベントの際、日本地図を大きくデザインに入れたTシャツを作ってくれました。
(井上)



● 任意組合から、合同会社(LLC)へ改組

● 日米ソーシャルファイナンス・フォーラム2007開催

2007

2008

● パートナーの一般公募を開始

創業から2007年までは、現役パートナーの推薦による加入だった

● 新生銀行が初の法人パートナーに

2009

● UBSグループが法人パートナーに

2010

● 第50回ネットワークミーティング開催

2011

● 東日本大震災の翌月、岡本拓也が2代目代表に

● SVP Internationalから寄せられた寄付金を震災支援の4団体に配分

● 「東北イニシアチブ」と名付けたパートナーのグループが被災地支援

● 合同会社(LLC)から特定非営利活動法人(NPO)へ改組することを決定

● ケアプロに出資

他団体では助成金として支出していたが、ケアプロとの協働2年目の100万円は増資に参加する形で拠出。現在も株主として関係が続く。

社長の川添さんからの提案でした。今後大きなファイナンスをしていくために自分はNPOではなく株式会社を選んでいたので、SVPが株主に入るのは信頼も高まるし、今後の呼び水になるからぜひ。僕は感動しまして…。当時は「ソーシャル」みたいな言葉が出て間もなかったですし、ベンチャーフィランソロピーを日本に持ってきたSVPだからこそ、このソーシャルファイナンスの第一歩を刻むべきだと思っていましたね。ケアプロへの投資は日本のソーシャルファイナンス、インパクト投資の先駆けだと言っていていいと思います。
(岡本)

2013

● パートナーが初めて100人超に

● アクセンチュア、三菱UFJリサーチコンサルティング(MURC)と法人プログラムを開始

● SVP東京10周年記念ネットワークミーティング開催

アメリカ各地のSVPからのご寄付をいただいて驚きました。こちらから依頼したわけではなく、数百万円というお金を集めていただいて、動きの速さも含めてすごうれしかったです。印象的でした。
(岡本)



パーソルグループ社員と起業家による報告会



楽天グループ社員と起業家による報告会



協働先団体を決める選考会

2014

● 投資・協働団体が30団体を突破

2015

● パーソルグループと法人プログラムを開始

2017

● 藤村隆が3代目代表に

● 歴代の投資・協働先団体が集まる「SVPまつり」開催

● 新公益連盟が発足、加盟

2018

● 楽天グループと法人プログラムを開始

● SVP東京15周年イベント開催

● 港区のSHIBAURA HOUSEへオフィス移転

2019

● 投資・協働先団体が50団体超に

2020

● 新型コロナウイルスにより、選考や協働はすべてオンラインに

2021

● 4代目は、共同代表4人の体制に

2022

● 累計のパートナー数が400人超に

2023



著名寺院の和室をお借りしたパートナー合宿(2017年)



コロナ禍の直前に対面で開催した第84回ネットワークミーティング(2020年1月)

「パートナー」と呼び続けている意味

2001年、創業者がSVPシアトルを訪問した当時から、SVPではメンバーをPartnerと呼んでいて、それを採用。2007年、合同会社(LLC)という法人形態を選んだのは、2006年の新しい会社法で誕生したばかりのLLCが、SVPが考えるパートナーシップを体現するのに一番近いと考えたからでした。それは、お金の出資だけではなく、自分の時間を使うことも同等の「出資」であり、同様の権利をもつことです。その後、2012年に法人の器はNPO法人に変わりましたが、一緒に汗をかくことやフラットな関係を大事にする思いは、パートナーという呼称にずっと込められています。

普通の会社組織でも労力をかけてオンライン化したと思いますが、パートナーのボトムアップで急速にオンライン化、この進化もすごかったと記憶しています。あわせて、ずっと家から参加していて、一度も誰も会ったことがないのにパートナーでい続けることの意味は何だろうということも問い直したと思います。(藤村)

投資・協働先 & パートナー 20周年アンケート

調査結果

SVP東京が20年の間に生み出してきた価値とは何なのか。それを探る観点から、これまでSVP東京が投資・協働を行ってきた団体と、団体の成長を支えてきた歴代のパートナーに対し、アンケート調査を行いました。

調査概要と回答者の属性

投資・協働先団体向けアンケート		パートナー向けアンケート	
調査目的	投資・協働先団体の協働当時の状況や認識を把握するとともに、協働終了後の状況と比較することで、協働先の成長にSVP東京がどのような役割を果たしたかを確認する。	調査目的	団体への投資・協働を担ってきたパートナー経験者を対象に、SVP東京での活動状況やパートナー自身にもたらした変化を尋ねることで、SVP東京がパートナーの成長に果たした役割を把握する。
調査方法	webアンケート	調査方法	webアンケート
調査対象	2005年～2021年に投資・協働先として採択された61団体 ※なお、投資・協働が終了した団体のみを対象としている	調査対象	2003年～2023年に加入したパートナー経験者423人 ※現在は活動を行っていないパートナーを含む
有効回答数	56件	有効回答数	132件

実施時期 2023年7月～8月 実施主体 NPO法人ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京 実施協力 水谷衣里(株式会社 風とつばさ)

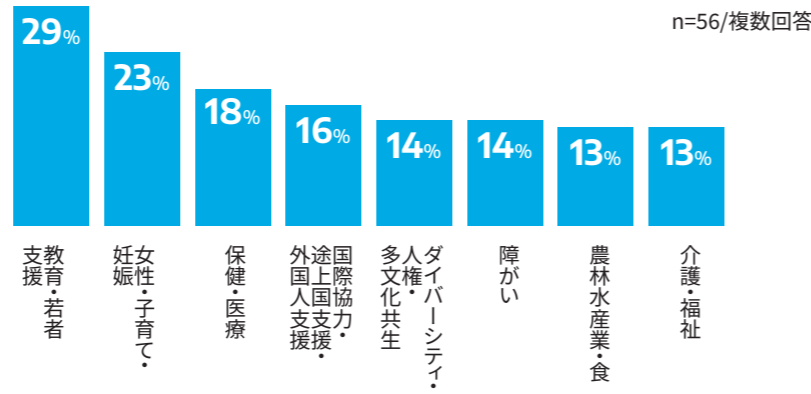
回答のあった団体の属性および当時の協働内容

■ 対象とする社会課題の領域

2005年～2021年に採択された61団体のうち、56団体から回答いただきました。複数の分野にまたがって活動する団体も多いため、最大2つまで複数回答可としました。

この結果、最も多かったのは「教育・若者支援」で29%、次いで「女性・子育て・妊娠」が23%、さらには「保健・医療」が18%と続く結果となりました。

右のグラフ 以下、人材育成・自立支援(9%)、貧困・生活困窮者支援(9%)、地域・まちづくり・伝統文化(7%)、環境保全・自然保護(4%)、その他(4%)



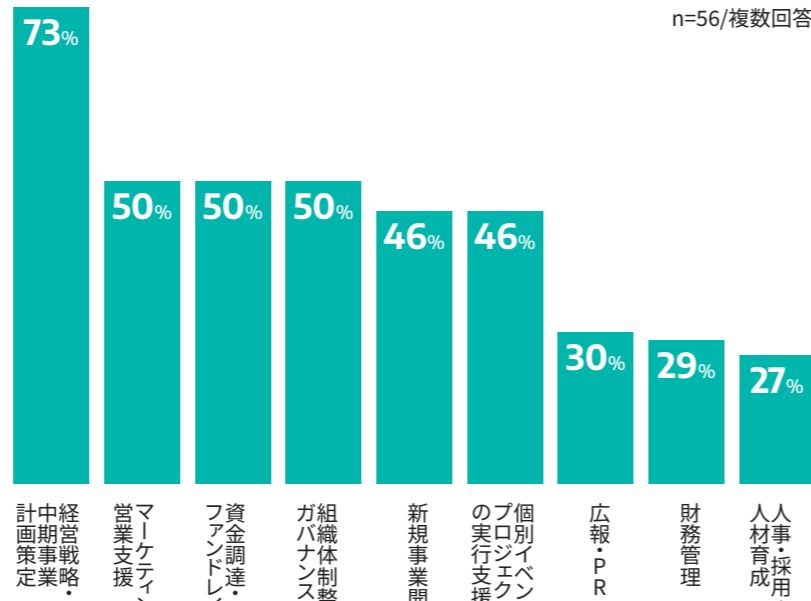
■ 協働内容

56団体がSVP東京と協働した内容について複数回答で聞きました。

最も多かったのは「経営戦略・中期事業計画策定」で73%、次いで「マーケティング・営業支援」、「資金調達・ファンドレイズ」、「組織体制整備・ガバナンス」が50%で並びました。

SVP東京の協働は、特定のテーマに限定せず、団体が必要とする内容にできる限り応えることが特徴です。この結果からは、団体のキャパシティ・ビルディング(組織的な能力・基礎体力を向上させること)に関わる内容が多くを占めていることがわかります。

右のグラフ 以下、人事・採用・人材育成(27%)、調査・白書制作(20%)、ITインフラ整備(18%)、その他(14%)

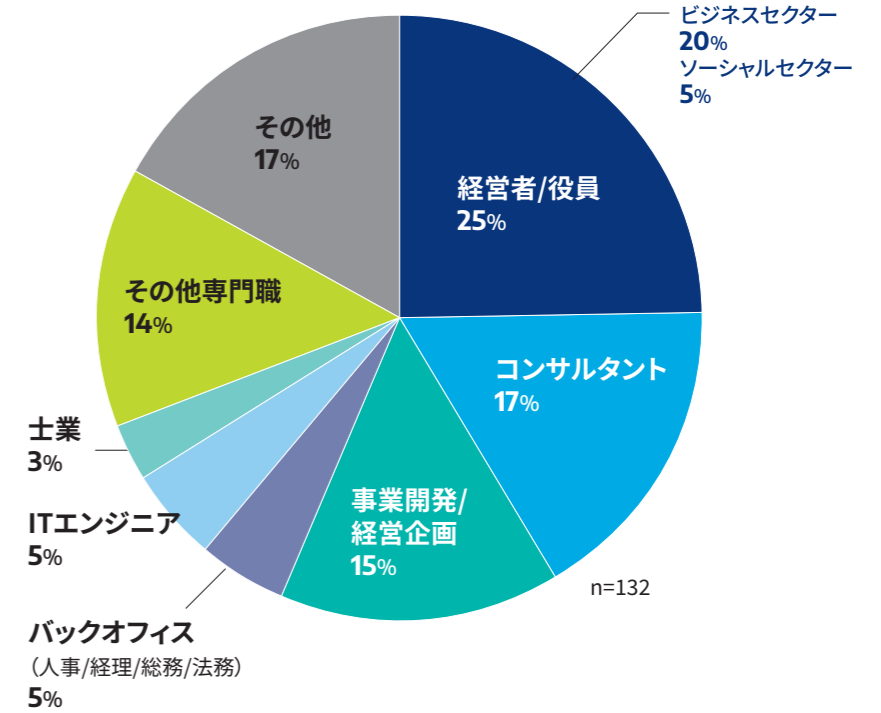


回答のあったパートナーの属性および在籍年数

SVP東京のパートナー制度は、年度単位で参加する方式を採っています。アンケート回答者のうち、約半数は回答時点でパートナーとして活動中で、残り半数は以前に参加した「卒業パートナー」でした。また、男女比で見ると、女性が4人に1人の割合を占めています。

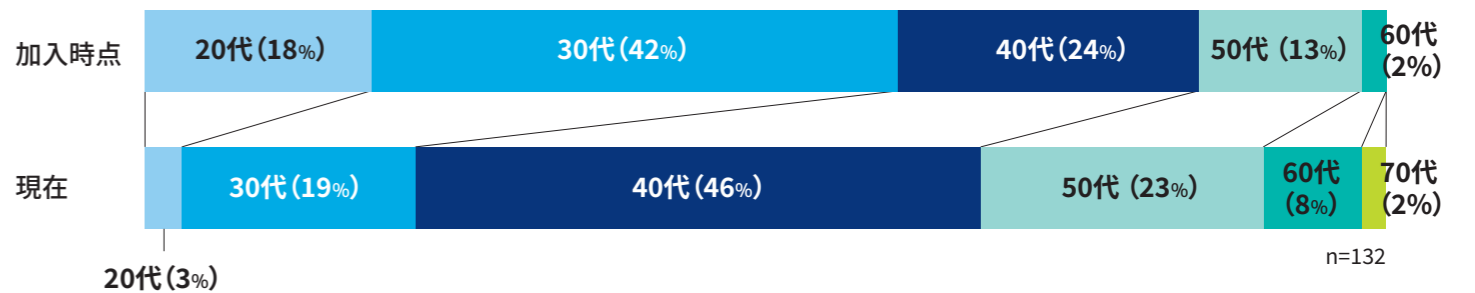
■ パートナーの職種

回答のあったパートナーの職種を見ると、「経営者/役員(ビジネスセクター)」が最多で20%を占めました。この中には、企業の経営層や自ら起業した会社の代表が含まれています。続いて「コンサルタント」、「事業開発や経営企画」が多くを占め、人事・経理・総務・法務などいわゆる「バックオフィス」で働くパートナーも一定数を占めています。加えて、弁護士、公認会計士、税理士、医師、ITエンジニア、金融、メーカー、財団、メディア、NPO法人役員など、多分野の専門的な知見を持って働くパートナーが参加していることがわかりました。



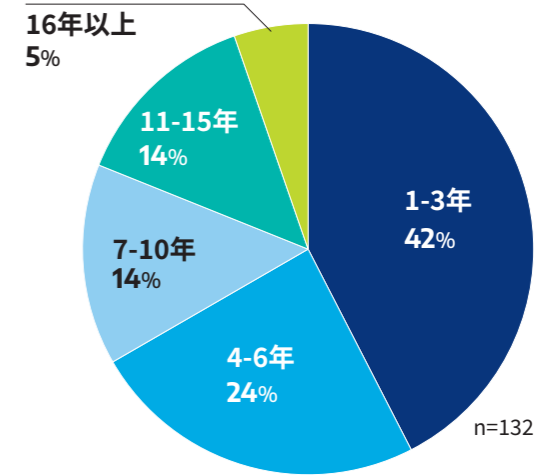
■ パートナーの年代

パートナーに対し、SVP東京に加入した年代と、現在の年代を聞きました。加入時点では、30代が最多で42%を占め、40代、20代、50代と続きました。一方、現時点では、40代が46%と半数に迫り、次いで50代・30代が2割程度を占めました。在席年数が長期間にわたるパートナーもあり、全体として年代が高くなりつつある傾向が見て取れます。



■ パートナーの在籍年数

P3の「数字で見るSVP」で紹介した通り、SVP東京のパートナー数は近年、100人程度で推移しています。長年継続しているパートナーが一定数いる一方で、1～2割程度が毎年入れ替わっています。今回のアンケートでは、SVP東京の在籍年数が「1～3年」のパートナーが4割強を占めました。

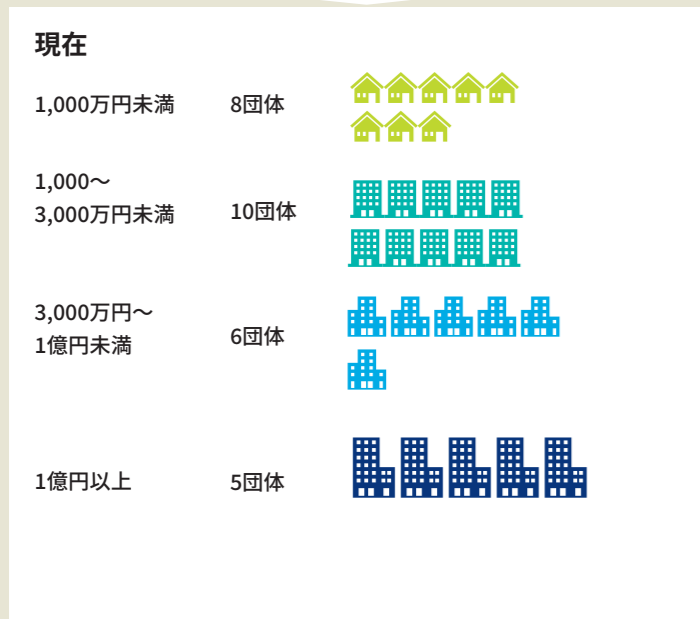
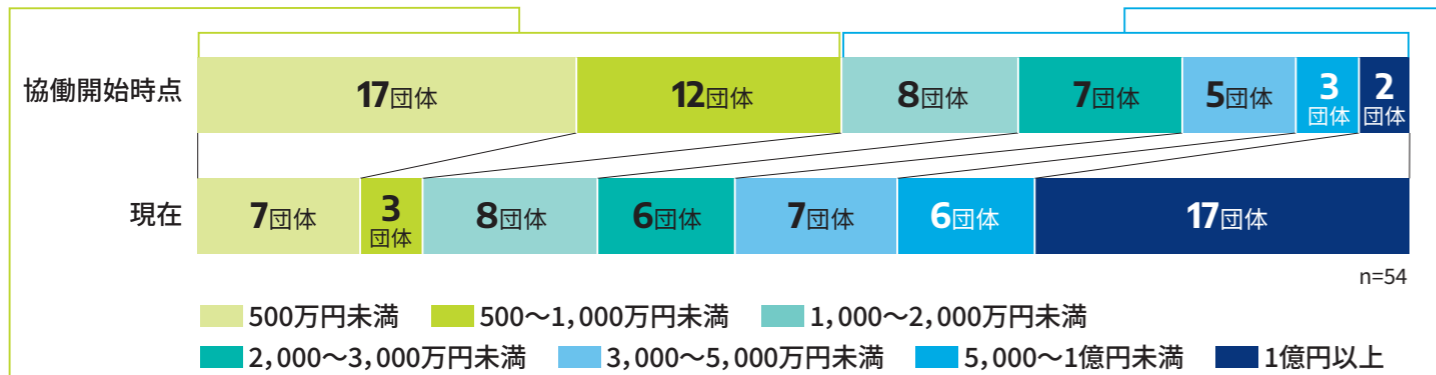


事業規模で見る協働先の成長

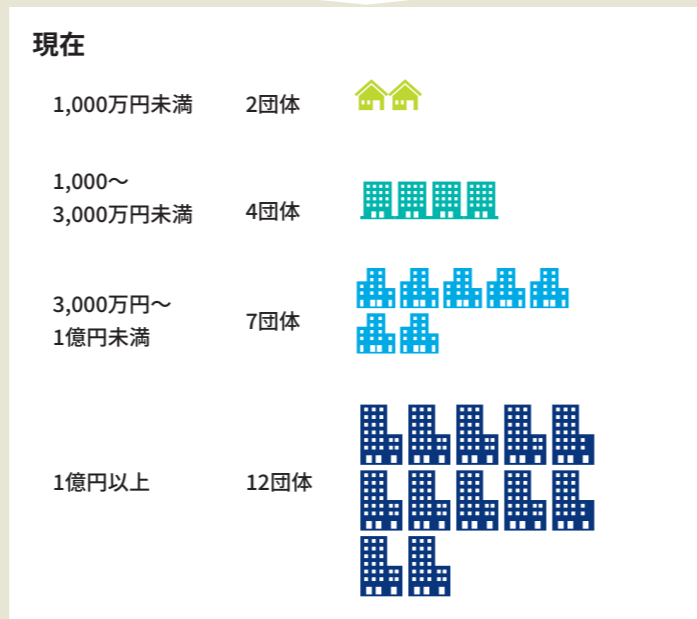
投資・協働先団体が生み出している社会的インパクトにはさまざまな面がありますが、ここでは団体の事業規模に着目し、SVP東京との協働開始時点と調査時点とを比べて推移を見ました。

■ 協働開始から現在までの事業規模の変化

協働を開始した時点の事業規模を見ると、500万円未満の団体が最多で全体の3割を占めています。一方、調査時点では、500万円未満の団体は半数以下の7団体に減少し、1億円以上の団体が2団体から17団体へと大きく増加しています。



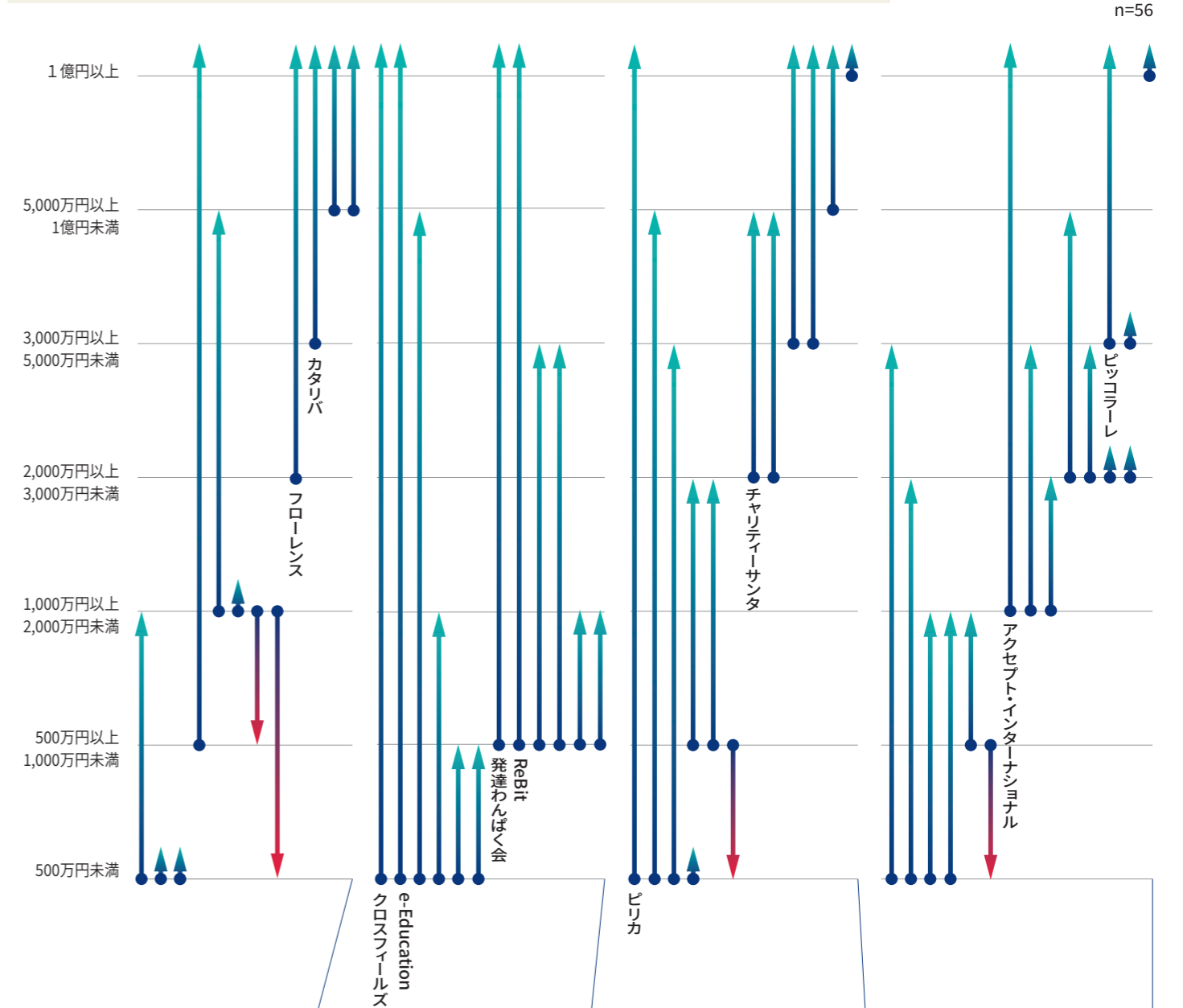
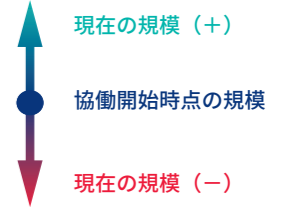
協働を開始した時点で事業規模が1,000万円未満だった団体に絞って見ると、1億円以上が5団体あるなど、事業を大きく成長させていることが際立って浮かび上がります。



協働開始の時点で1,000万円以上だった団体に絞って見ても、1億円を超える団体が2団体から12団体に増えており、着実な成長を確認できます。

■ 協働先団体における事業規模の変化

協働先の事業規模の変化を団体ごとに示しました。下記の図では、●印が協働開始時点、矢印の先端が調査時点での事業規模を表しています。SVP東京との協働開始の時期は団体によって異なるため、協働開始年次ごとに4つのグループに分けました。また各年代のうち、一部の団体について法人名を記しています。※各団体の紹介は巻末の一覧をご覧ください。



2005-2010

協働終了から11年以上が経過

2005年から事業の立上げ期に協働したフローレンスは、2023年度の事業規模が約40億円。2009年から協働で経営基盤強化に取り組んだカタリバは、2023年度の事業規模が約16億円に。双方とも日本を代表するNPOへと成長しました。

2011-2014

協働終了から7~10年

クロスフィールズは、NPO法人を立ち上げた2011年から協働を開始し、2023年度の事業規模が2.7億円と飛躍的な成長を見せています。同じ2011年採択の発達わんぱく会、2013年採択のe-Education、2014年採択のReBitも、事業規模1億円を超えています。

2015-2017

協働終了から4~6年

2015年から協働したピリカは当初の事業規模500万円未満から2024年9月期の事業規模は2億円に。同じ2015年から協働したチャリティーサンタは、2023年度の事業規模が1.3億円を超えました。

2018-2020

協働終了から3年以内

2018年の協働初年度にNPO法人を立ち上げたピッコラーレは、2023年度の事業規模が1億円を超える規模に成長。2019年から協働したアクセプト・インターナショナルは、当初の事業規模2,000万円未満から、2023年度は3億円を超えています。

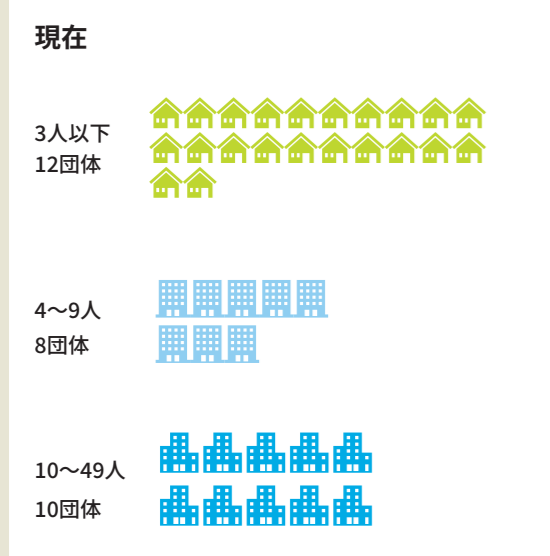
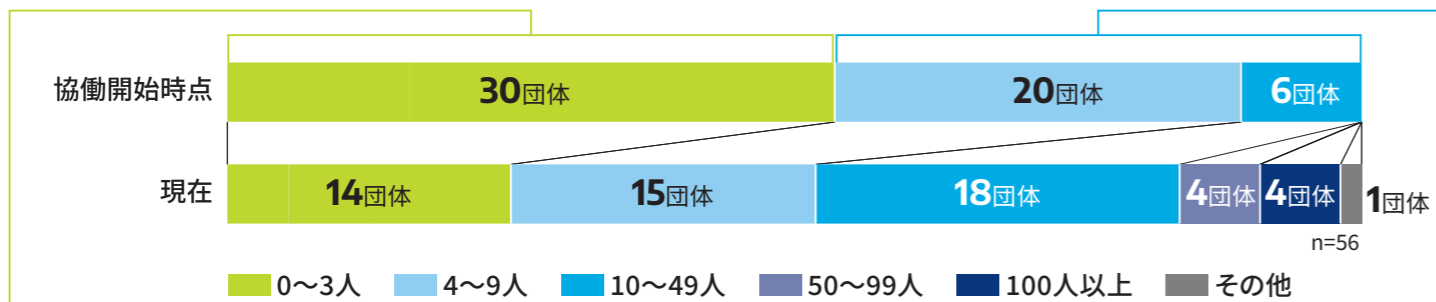
スタッフ数で見える協働先の成長

次に有給スタッフ数の推移から、協働先団体の成長を分析しました。

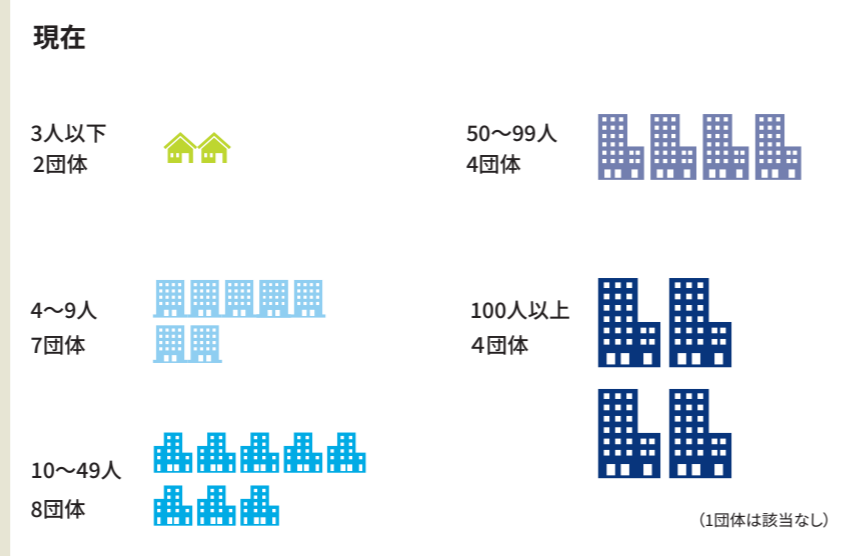
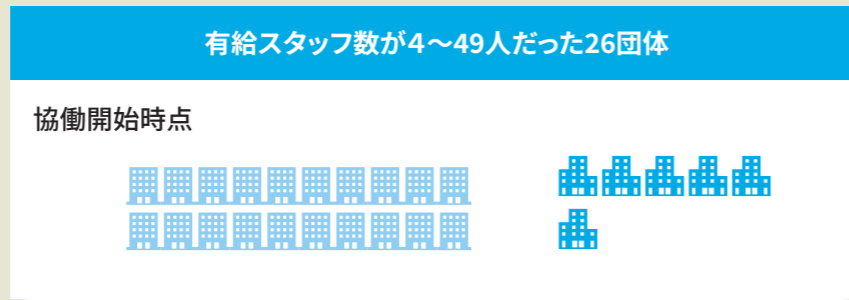
※なお、常勤／非常勤、雇用／業務委託の違いに関わらず、有給スタッフとしてカウントしています。

■ 協働先団体における有給スタッフの変化

協働を開始した時点では、有給スタッフ数が3人以下の団体が30団体と最も多く、全体の半数以上を占めていました。しかし調査時点では、3人以下の団体は14団体と半減しています。また、10～49人の団体が3倍に増え、協働開始時点ではゼロだった、有給スタッフ数が50～99人、100人以上の団体がそれぞれ4団体ずつ現れています。調査結果から推計したところ、有給スタッフ数は56団体の合計で1,000人以上増加したことがわかりました。協働先の団体の成長は、雇用の創出という意味でも社会にポジティブな影響をもたらしたことが伺えます。



協働開始時点で有給スタッフ数が3人以下だった30団体に絞ってみると、4～9人に増加した団体が8件あるほか、3分の1にあたる10団体は10～49人に増加しており、拡大傾向は明らかでした。



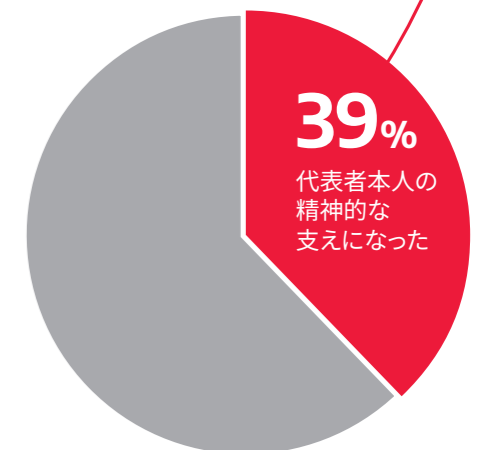
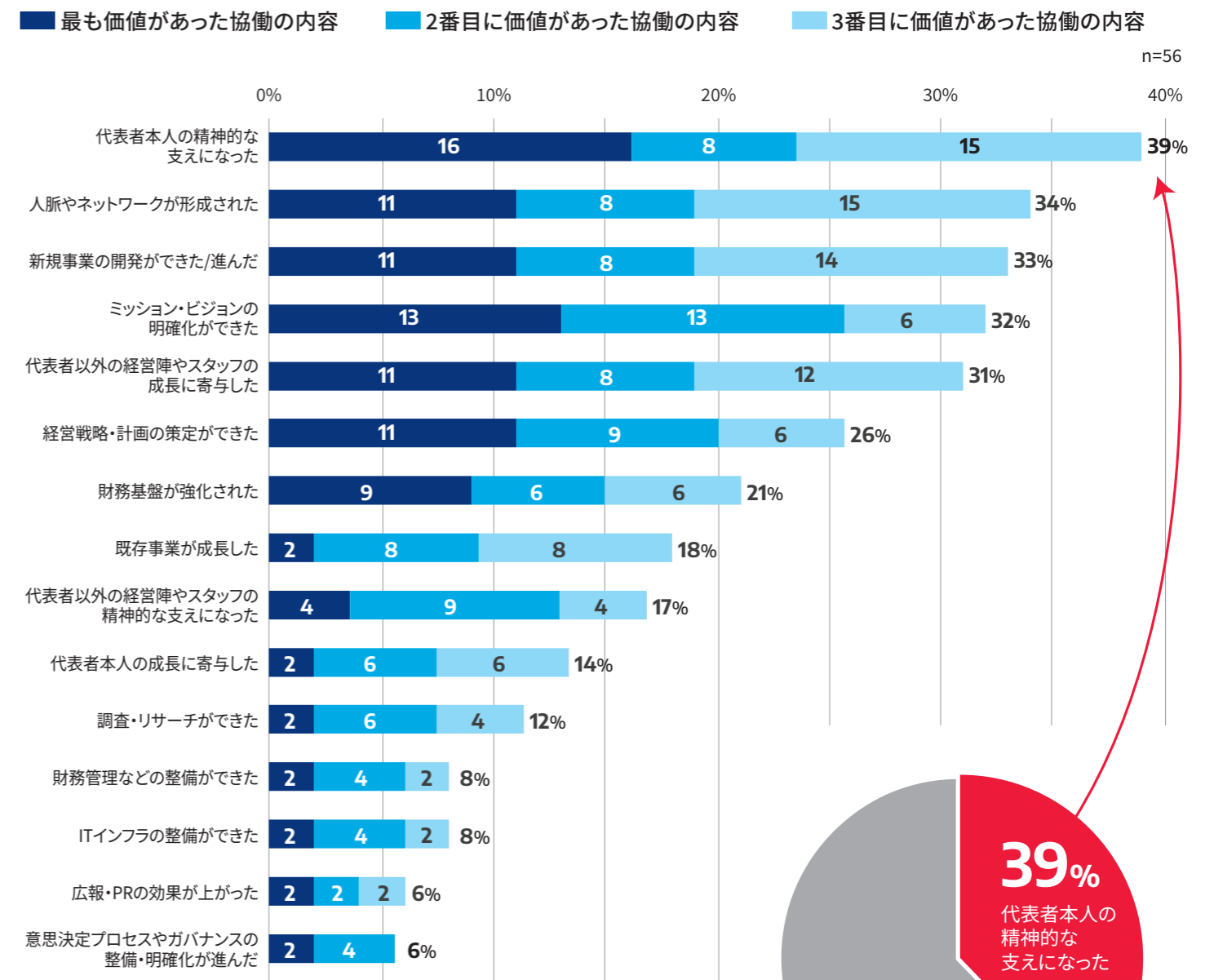
協働開始時点で有給スタッフ数が4～49人だった26団体に絞ってみると、人員規模を縮小した団体も一部あるものの、50～99人が4団体、100人以上が4団体それぞれ現れるなど、顕著な成長を示しています。

団体にとっての協働の価値

SVP東京では、特定のテーマに限るのではなく、団体の成長に必要と考えられるさまざまなサポートを同時並行で行っています。団体が協働の際にどのような価値を感じていたか、最大3つまで、順位をつけて回答いただきました。

■ 協働先団体にとって価値があった協働

「代表者本人の精神的な支えになった」と回答する割合が39%と最も多い結果となりました。また「最も価値があった協働」としてこの選択肢を選ぶ割合も16%と最多で、SVP東京のパートナーによる伴走が、団体代表者の精神的な支えになっていたことが伺えます。続いて、「人脈やネットワークが形成された」「新規事業の開発ができた／進んだ」が、いずれも3割を越す結果となりました。また、同じ3割台の回答でも、「ミッション・ビジョンの明確化ができた」という選択肢を「最も価値があった」「2番目に価値があった」とした団体が多いことは、2年間にわたる協働で対話を重ねるSVP東京の特徴が表れた結果であるように思います。



前ページで取りあげた「団体にとっての協働の価値」を象徴する事例をまとめました。

団体代表と協働したパートナーの声は、アンケートの自由回答から抜粋しました。また一部、追加でヒアリングを行いました。

▶ 代表本人の精神的な支えや、成長に寄与

e-Education

e-Education



三輪 開人 代表

協働開始のタイミングで前職(JICA)を退職したこともあり、非常に不安の多い日々でしたが、そんな中で「独りではない」ことを実感できたのが、SVPのチームのみなさんの伴走でした。「学生団体からの脱却」が大きな成果や価値だと考えます。協働開始時は、ほぼ全てのメンバーが大学生インターンでしたが、協働終了時には職員中心の組織となり、今も変わらずプロフェッショナルな団体を迷わず目指しているのは協働期間のおかげだと思っています。

協働期間：2014年～2016年
「最高の教育を世界の果てまで」というミッションのもと、15ヶ国4万人以上の中高生に教育を届ける。バングラデシュでは最高学府ダッカ大学含む難関国立大学の合格者数が累計500名以上。協働では、組織基盤作りや支援者獲得に向けたファンドレイジング、Webマーケティングなどを支援。2021年に認定NPO法人となり、マンスリーサポーターは2020年9月に1,000人を突破。

協働したパートナーの声

“代表交代の時期が協働開始時期と重なり、これでやっていっていい、という方向性を後押しする力になれたと考える。団体の向かっていく方向性やそのための方策ひとつひとつについて考えを整理する壁打ちの時間が重要であった時期だし、また、2年目からはメンバーが増えてメンバーの仕事の整理に寄り添っていくことで組織体制を整えていくことに貢献できたのではないかと。”

ReBit

ReBit



薬師 実芳 代表

社会人1年目からの協働のため、プレゼン資料の作り方やExcelでの表の作り方、営業に同行いただいてフィードバックもいただき、本当に社会人基礎の部分を教えていただきました。収益基盤としての企業研修や企業との協働事業をつくれたのは、SVP東京との協働の成果。今でも収益の柱であるとともに、ソーシャルインパクトを出している部分なので感謝しています。

協働期間：2014年～2016年
LGBTQを含めた全ての子どもがありのまま大人になれる社会を目指し、LGBTQの教育、就労、福祉分野に取り組む。当初、出張授業や成人式を中心とした活動をしていたものの、事業収益は限られていた。ミッションの明確化からスタートし、日本初のLGBTQ学生向けの就活イベントや、収益の柱となる新規事業（企業研修）の戦略、企業開拓を支援。2023年度の事業規模は約1.7億円に。

協働したパートナーの声

“当時社会人になりたてであった代表に対し、NPO経営において必要となるマインドセットやスキル（事業計画策定、財務管理、プロジェクトマネジメント）の習得を手助けすることができた。”
“代表からの依頼で、職員のメンターとして月1回の面談を実施。事業のことから人間関係、働き方まで様々な相談に乗り、職員の成長を支援した。”

Sankakusha

サンカクシャ



荒井 佑介 代表

各事業を進めるスタッフは増えたものの、経営は主に代表1人が担う構造だったため、団体の経営課題を共有できる相手がいなくて、一緒に悩んでくれる方がいたことがすごくありがたかった。団体が大事にする哲学が明確になり、それを対外的に伝えることができるようになりました。その結果、事業が広がったと感じています。

協働期間：2020年～2022年
親や身近な大人を頼れない15～25歳くらいまでの若者が孤立せず、自立にむかえるよう、若者の社会参画を応援する活動に、居場所、仕事、住まいの観点から取り組む。協働当初は、事業の方向性について様々な選択肢があり得る中で、何を大事にするのか繰り返し議論。ビジョン・ミッションの言語化や事業内容を整理し、それを表現するWebサイトを制作。地域内で連携する企業の紹介や営業同行なども行った。

協働したパートナーの声

“荒井さんを取り巻く環境の変化や荒井さん自身の課題意識の変化、それに伴う団体のミッション・ビジョンの変化についての言語化を、長期的な関わりを通じて行うことができた。協働終了時期に公開されたHPにも協働での議論を通じて言語化された文言が記載されていた。”
“事業領域や方向性を定めるにあたって戦略的な要素だけでなく精神的な要素も含めて支えになったと思います。”

▶ ミッション・ビジョンの明確化が発展に

Charity Santa

チャリティーサンタ



清輔 夏輝 代表

白書の発行に伴って、助成金を取得できるようになり、メディア露出が増えました。活動方針を決める上で調査活動をするのが日常的になりました。「やっぱりミッションに忠実にやるのが大切なんじゃないですか？」というあるパートナーの言葉は印象に残っています。そして、2年目の最後のタイミングで、ミッションに沿った書店業界とのプロジェクト「ブックサンタ」の取り組みが始まりました。協働最後の卒業イベントの時に、「今度新しく取組を始めるんです」と発表しましたが、開始から今年で7年、直近では団体の収益の約半分がブックサンタになっています。

協働期間：2015年～2017年
「あなたも誰かのサンタクロース」を合言葉に、ボランティアのサンタクロースによる訪問活動を33都道府県44支部で展開。協働では、サンタクロース活動の社会的な効果を検証するための定量化プロジェクトを設計、アンケート調査など実施。金融機関から初めて融資を獲得するための支援も行った。協働の後半に立ち上げた「ブックサンタ」の取り組みは、全国47都道府県の書店、1,868店舗が参加し、累計26万冊の本が集まる事業に成長。

協働したパートナーの声

“サンタ白書を発行したことで、団体が定量的なPRができるようになった。”
“協働団体の中で軸が固まることで、取組の方向性へのプレグが減少したのではないかと。”

LORANS

ローランズ



福寿 満希 代表

自分たちが今向き合っている課題が何かを整理し、4分野の課題解決に対してチームに分かれて共に取り組んでいただきました。想いや考えに対して「なぜ？」と何度も掘り下げ本質の解を見つけてくれるパートナーとの壁打ちには常に深く考えを巡らせるものでした。基盤整備面では、財務や人事体制、規程類等の整備をスタートし、働きやすい環境作りの基盤のもとで現在障害者を含む80名が働くことができています。障害者雇用が、自社を越えて広がるよう「障害者の共同雇用」の仕組みを運営する事務局立ち上げも共に行い、現在日本初で唯一の取り組みを実施できています。日本の雇用がさらに前進する全ての基盤準備がSVPで行われました。常に味方でいてくれたことは心の支えとなり感謝しています。

協働期間：2019年～2021年
「人を咲かせる花屋」。障がいや難病など就労困難な方の雇用に取り組む。東京都国家戦略特区と連携し、「障がい者の共同雇用」のための新しい雇用創出のモデルを作る。協働では助成金獲得を進める一方、月次管理、事業部別採算管理ができる財務管理を導入、事業拡大の基盤を整備。2024年4月、東京2020五輪選手村跡地の再開発で注目される晴海に新店舗を開店。従業員80人のうち、障がいのあるスタッフが55人を占める。

協働したパートナーの声

“当時、現場で働く幹部や職員の方は、日々の業務に忙殺され代表の想いや目指す姿を耳にする機会が持てていなかったように思います。そこで、ミッション・ビジョンを新たに作成することから活動を始め、壁打ちすることで、代表ご自身も想いや目指す姿が研ぎ澄まされたのではないのでしょうか。ミッション・ビジョンは時間とともに少しずつ手が増えられ、今では確固たるものとして会社内で確立されている。”

▶ 代表者以外の経営陣やスタッフの成長に寄与

Piccolare ピッコラーレ



中島 かおり 代表

経営陣やスタッフが一对一で話す「壁打ち相手」になってもらう人を、SVP東京のチームの中から見つけることができました。またその関係性が今も継続しています。ピッコラーレが大切にしている、誰もが持っているSOSを出す力を、メンバー一人一人がSVP東京の皆さんに、「相談したいことがあります」「話を聞いてください」という形で発揮する機会ができ、それによってエンパワメントされる経験をする事ができました。

協働期間：2018年～2020年

「妊娠葛藤相談」窓口の運営など、「にんしん」をきっかけに、誰もが孤立することなく、自由に幸せに生きることができる社会の実現を目指す。

協働では、多拠点に分かれて活動するスタッフのためのコミュニケーション活性化やITインフラ導入、「妊娠葛藤白書」の企画、居場所のない妊婦のための居場所事業を立ち上げる資金調達や不動産取引などを支援。協働期間中にNPO法人を設立、2022年に認定NPO法人となり、事業規模は1億円を超えた。

協働したパートナーの声

“パートナーの紹介で、事務局長となるメンバーが団体に加わったことで、組織内のコミュニケーションや役割分担に変化が生じ、組織基盤の強化につながる様々な好影響があった。”
“妊産婦の居場所づくりのプロジェクトを支援して、居場所が立ち上がり、今も続いている。ファンドレイジングの型ができて自走している。”

▶ 新規事業を開発

Pirika ピリカ



小島 不二夫 代表

路上のゴミ捨てごみ分布をIT機器を用いて調査する「タカノメ」という新規サービスを開発し、自治体等の顧客から売上が上がり始めるところまでを伴走していただきました。クラウドファンディングを通じた開発資金の調達、試作した製品を活用した実地調査の実施、調査結果の報道発表会やメディア対応、顧客開発やビジネスモデルの構築に協力いただきました。現在タカノメ事業はピリカの中で最も売上規模が大きく、世界展開をする上で無くてはならない重要な事業となっています。

協働期間：2015年～2017年

「科学技術の力であらゆる環境問題を克服する」と掲げ、ごみの自然界流出問題に取り組む。

協働ではごみ拾いSNS「ピリカ」の拡大、路上の散らごみを調査する「タカノメ」やマイクロプラスチック調査「アルバトロス」の新サービス立ち上げと自治体への導入に協力。海外展開を見据えて事業計画への助言や広報支援を行った。「ピリカ」を通じて拾われたごみは協働当初の約1,000万個から現在は3.5億個以上に。

協働したパートナーの声

“「タカノメ」が開発されたばかりで、その事業戦略に貢献できた。”
“個別のテーマで深く関わったものも多かったと思う一方、会社メンバーでのミッション・ビジョンのインストールといった面での成果が大きかったと考えています。”

▶ 1億円のファンドレイズに貢献

BBED バイリンガル・バイカルチュラル ろう教育センター (BBED)



玉田 さとみ 事業統括ディレクター

クラウドファンディングなどの寄付文化がなかった時代に、さまざまなアイデアで寄付活動を推進し、予定以上の寄付金をあつめることができました。運営していたフリースクールが、私立の特別支援学校に生まれ変わりました。その学校も、今年で16年目(調査当時)になります。一方、BBEDは次なる課題を解決するための活動を行っています。SVPとの協働で得た経験と知識は、どんな課題でも解決できるという自信につながりました。

協働期間：2007年～2009年

ろう児のためのフリースクールを運営していたが、東京都教育特区として認められ、学校法人を設立するために必要な寄付金集めを開始。約1年で1億円を集めた。2008年4月、幼稚部・小学部を持つ「学校法人明晴学園」を創設。続いて2010年に中学部を開設した。

協働では、学校法人設立に必要な資金の寄付集めのための戦略策定、実行をサポート。開校後は会計などの実務と、2年後の中学部開設に向けた準備を支援した。

協働したパートナーの声

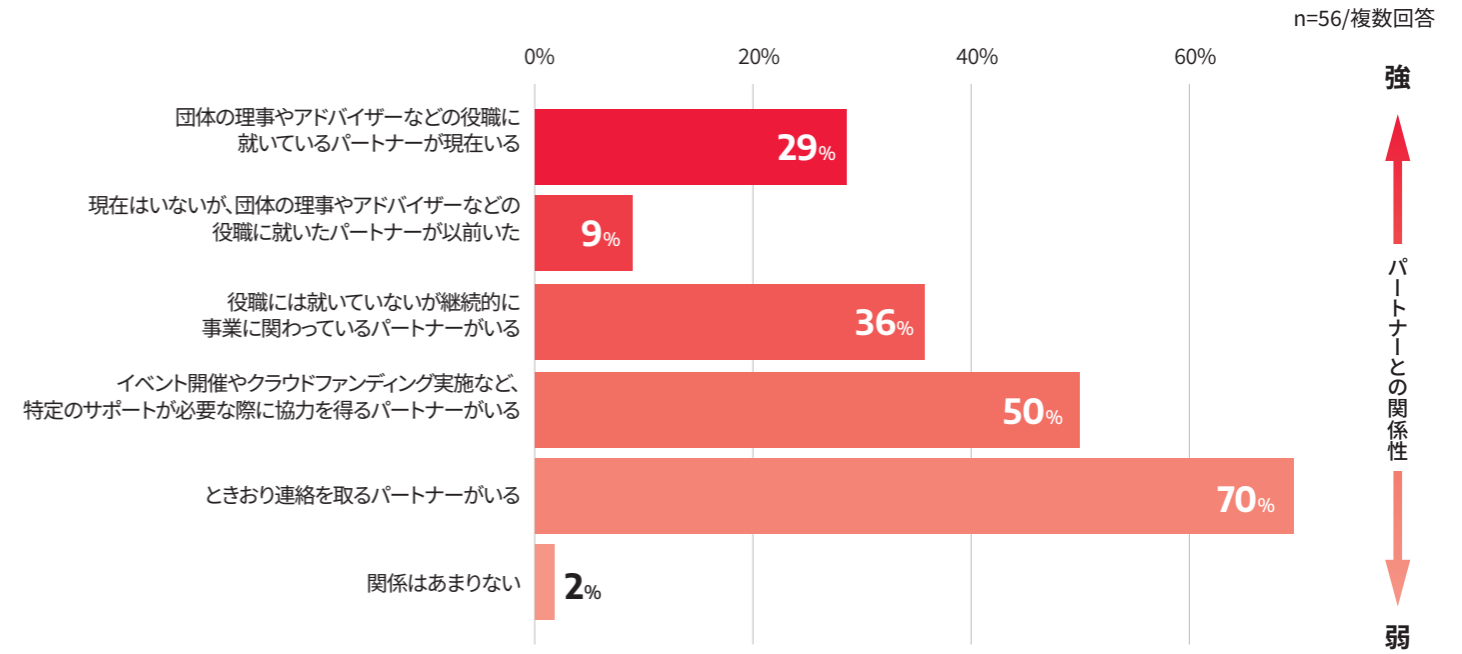
“「夢の学校をつくる」素晴らしいチャレンジにご一緒させていただき、感謝です。パートナーのスキルにあわせてファンドレイジングや東京都の特区の関係の書類作成などチームで手分けして関わって、チーム支援のすばらしさも体感しました。”
“プロボノでNPOの経営が加速する可能性を実感、その後2名のSVPパートナーはソーシャル分野で起業、文字通り人生が変わる経験となった。”

協働終了後のパートナーとの関係性

SVP東京の投資・協働は原則として2年間です。長期にわたって社会人が伴走する仕組みは他の支援組織にはない、SVP東京の大きな特徴です。協働期間が終了した後、パートナーとどのような関係を築いているか、団体に尋ねました。

■ パートナーとの関係性

協働終了後の現在、SVP東京のパートナーが何らかの役職に就いている団体が29%、役職に就いていなくても継続的に事業に関わっているパートナーがいる団体が36%に達しました。一方で「関係はあまりない」と答えた団体はわずか2%で、関係性が継続するケースが多いことが伺えます。



※回答の際は、SVP東京に現在在籍しているパートナーだけでなく、卒業したパートナーも含めて、あてはまるものすべてを選択いただきました。

▶ 月に1回の会合を10年以上続けている

CROSS FIELDS クロスフィールズ



小沼 大地 代表

SVPでご縁を頂いたVチームの皆さんが、団体を立ち上げるプロセスの中でどれだけ心の支えになってくださったのかは、本当に言葉にできません。その後、特に木下万暁さんには監事として、白井清さん・岡部正寛さんには相談役として、10年以上にわたって団体と一緒に歩んでいただきました。創業期から伴走して下さっている皆さんと「1つ1つの意思決定が本当に創業期に打ち立てた志に則っているのか」「誰に対しても真摯さを持った経営をできているのか」といった組織運営のなかでもっとも大切な問いを壁打ちできていることは、自分にとって大きな価値がありますし、心から幸せを感じています。たくさんの方のご縁を頂き、SVPの皆さんには、感謝しかありません。

協働期間：2011年～2013年

企業の人材が、国内外のNGO・スタートアップに飛び込み、本業のスキルと経験を活かして社会課題の解決に挑む「留職」プログラムなどを実施する。創業した年に投資・協働先となり、「留職」を導入する1社目の日本企業を開拓することに注力。ベトナム、カンボジア、インドネシア、インドと派遣先と派遣企業を増やしていった。2023年までに計52社が留職を導入、事業規模は2.7億円に。

協働したパートナーの声

“発足当時、新しい概念であった「留職」プログラムの認知を広げ、実際の採用に結びつける活動の後押しができたと思う。「第三者視点で最初に活動の意義を認めてもらった気がして励みになった」と言われたのは今でも印象に残っている。”
“特に人事面においてさまざまな葛藤を抱えていた時期において、寄り添い、励ます事ができたと思います。1名は監事、2名が相談役として残っている事も重要な事実かと。”

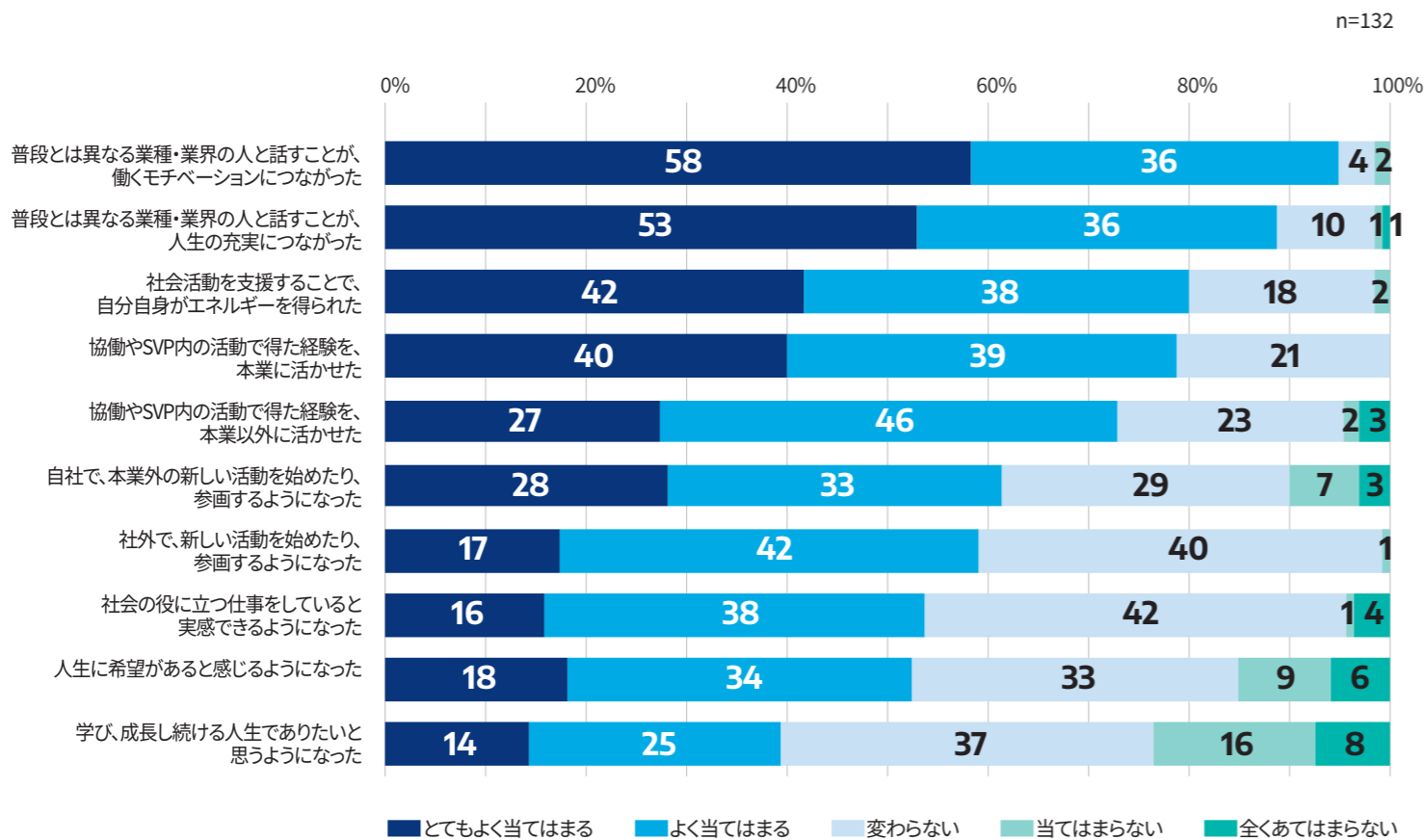
パートナー自身への影響

SVP東京は、協働先団体の社会的インパクトを高めることに加えて、協働を通じてパートナー自身が学び、成長する場となることを、もうひとつのミッションとして掲げています。SVP東京での活動が、パートナー自身の生活や仕事にどのような影響を与えたか、また自身の成長や変容にどうつながったか尋ねました。

生活や仕事にもたらした影響

「普段とは異なる業種・業界の人と話すことが、働くモチベーションにつながった」という設問に対し、「とてもよく当てはまる」または「よく当てはまる」と答えたパートナーは、94%と高い割合を示しました。

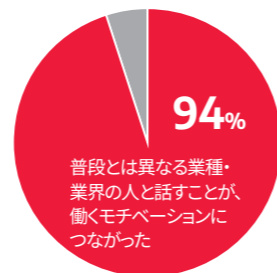
またそうしたコミュニケーションが「人生の充実につながった」と答える割合も9割近くを占め、「社会活動を支援することで、自分自身がエネルギーを得られた」、「協働やSVP内の活動で得た経験を本業に活かした」とともに8割程度と高い割合を示しました。



多くのパートナーや起業家との出会い、あたらしい社会課題への気づき、情熱を持ったメンバーとチームで仕事をするの喜び、こうしたことがモチベーションに。

パートナーが受けた影響が、その後のキャリアや仕事の以外の活動や人間関係のどこかで活かされることで、世の中にsocial goodの種まきをしていける。

SVP東京の価値は同じ志を持つ人のコミュニティ機能にあると思う。不思議と初めて会った人でも最初から知っていたように感じたのは同じ文脈を共有していたからか。

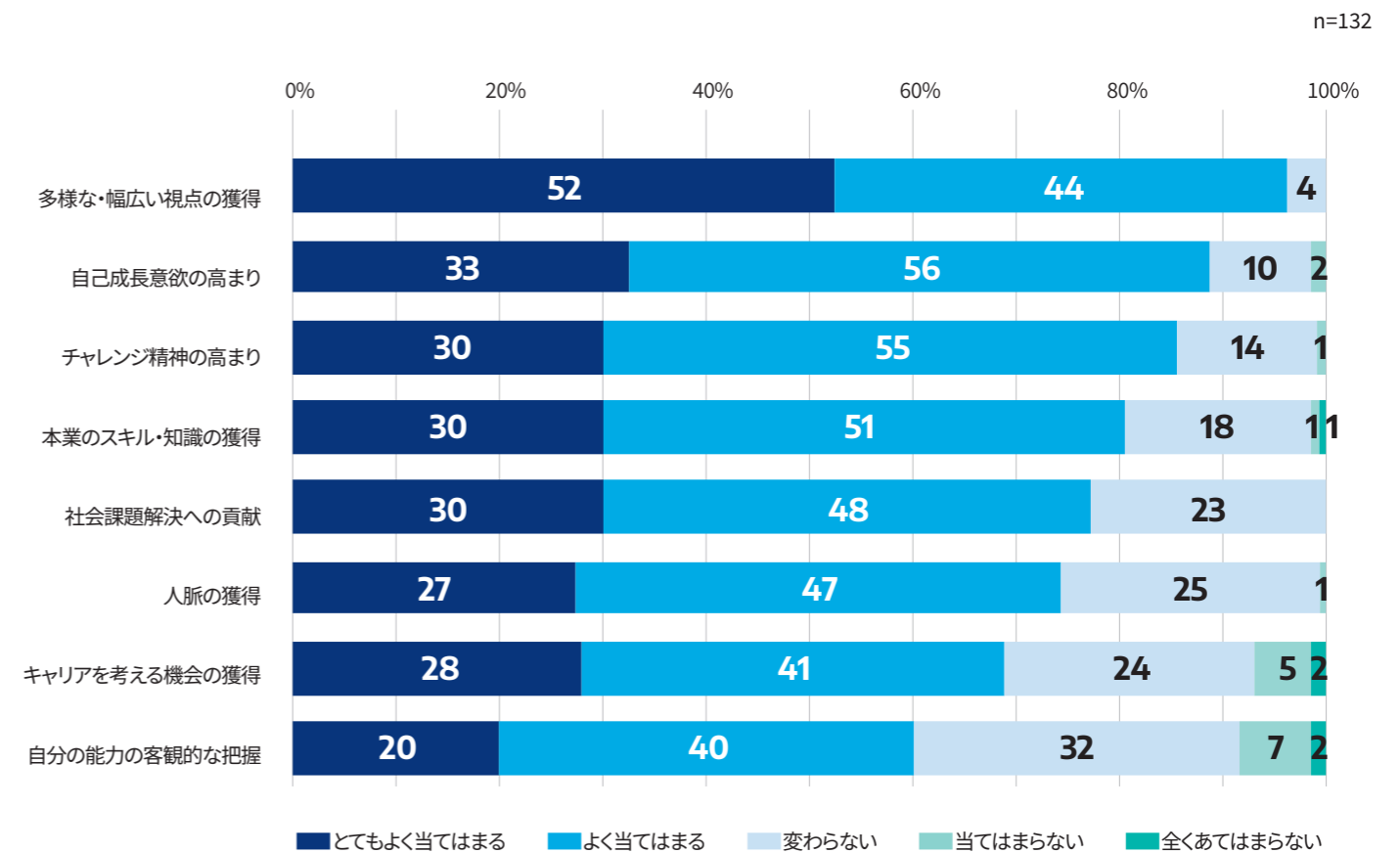


アンケートの自由回答から抜粋

SVPでの活動がもたらしたパートナー自身の成長や変容

「多様な・幅広い視点の獲得」につながったという回答が最も多く、「とてもよく当てはまる」または「よく当てはまる」と答えたパートナーは、96%と極めて高い割合を示しました。

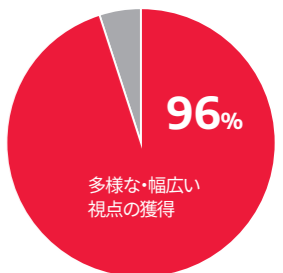
また、「自己成長意欲の高まり」を感じているパートナーが89%、「チャレンジ精神の高まり」が85%に上るなど、SVP東京での活動の結果、パートナー自身が内的な変化を実感していることが伺えます。



SVPに入ったことで大量の未知の社会課題を知る機会を得ました。取り組むべき／取り組みたい課題がたくさん残っている。

無理のない範囲で活動でき、自らの視野の拡大、新たな知見の獲得、人的ネットワークの拡大など、自己の成長にもつながっている。

普段出会わないような色々な人との出会いや会話が楽しく、毎年新しい発見があり、刺激をうける。一人暮らしだが、コロナ禍でも協働やSVPの活動があったお陰で、社会と繋がっている感覚を持ち続けられ、このコミュニティに対する愛着が強まった。



アンケートの自由回答から抜粋



2022年12月18日Sun.

20th KICK OFF



歴代の投資・協働先団体、SVP東京の卒業パートナー、現パートナーが集まる同窓会のようなイベントを2回開催



2023年8月27日Sun.



社会起業家の成長と伴走
～未来を創る“仲間”に出会う～
2023年10月10日(火)
社会起業家3人が登壇

小沼 大地 (NPO法人クロスフィールズ 代表)
中島 かおり (認定NPO法人ピッコラーレ 代表)
岡本 拓也 (株式会社LiveQuality大家さん 代表取締役/
NPO法人LiveQuality HUB 代表)



20th KICK OFF



コロナ禍があり、対面では3年ぶりとなった公開イベントを開催



ワークライフシフト with SVP
～未来を創る“仲間”に出会う～
2023年11月30日(木)
SVP東京の現パートナー2名と
卒業パートナー2名が登壇

相良 美織 (株式会社バオバブ 代表取締役)
石川 貴志 (一般社団法人Work Design Lab 代表理事)
中島 満香 (合同会社swan 代表社員)
藤原 幹太 (認定NPO法人カタリバ 職員)



SVP東京 20年の価値

株式会社風とつばさ 水谷衣里

SVP東京が、20年という歳月をかけて生み出してきたものは何だったのだろうか？ 本稿ではこの問いに向き合ってみよう。

■日本初のベンチャーフィランソロピーとして

Social Venture Partnersは、1997年、米国シアトルで生まれた。ビジネスパーソンが中心だったSVP Seattleのメンバーは当時、この取り組みが他の地域に波及するとは考えていなかったという。しかしArizona・Austin(1998年)、Denver・Boulder(1999年)、Pittsburgh・Calgary・Kansas City・Bay Area(2000年)と、取り組みは瞬く間に全米に広がっていった¹。

こうした中、SVPモデルを東アジアで初めて実践したのはSVP東京だった。始まりは、後にSVP東京の初代代表となる井上英之、当時独立系VCで働いていた影山知明の2名が2001年9月に渡米したことにある。設立当時「Social Venture Partners Tokyo Bay」と呼ばれていたSVP東京は、日本に初めて登場したベンチャーフィランソロピーでもあった。

■時代を先取りする存在としてのSVP東京

では90年代後半～2000年代にかけて、ソーシャルベンチャーを取り巻く日本社会の状況はどのような段階にあったのだろうか？

日本において、NPO法が施行されたのは1998年。SVP Seattleが誕生した翌年のことだ。SVP東京が第1回のネットワークミーティングを開催したのは2003年。その年は日本の「CSR元年」と言われている。「ソーシャルビジネス」という言葉が普及するきっかけとなった「ソーシャルビジネス研究会」が、経済産業省に設置されたのは2008年のことだ。なお「プロボノ元年」は2010年とされる。そして2011年の東日本大震災。クラウドファンディングプラットフォームが急速な増加を見せたのはこの頃である。

こうして振り返ると、SVP東京が誕生した2000年代初頭の日本社会は、「ソーシャルベンチャー」や「プロボノ」への理解も、「伴走支援」という言葉も、ましてや「ベンチャーフィランソロピー」という概念も全く普及していなかったことがわかる。その中であってSVP東京は、ビジネスパーソンが自らの資金と時間を投じ、ソーシャルベンチャーと協働する「ベンチャーフィランソロピー」という、その先訪れる時代をまさに先取りする存在として始まった

と言えよう。

本稿の執筆にあたり、設立当初の企画案を拝読した。そこに記されていたのは、革新的なソーシャルベンチャーのサポートと社会的インパクトの創出、そしてビジネスパーソンの自己表現や人生の複々線化、といったキーワードだった。これらの言葉は20年たった今、普及を見せ始めている。今振り返ればこうしたミッションを掲げる組織が2000年代前半の日本に登場したことそのものが、SVP東京の大きな価値だったと言えよう。

■協働先にもたらしたもの～成長を支える存在として

こうして誕生したSVP東京は、20年の歩みの中で、協働先に何をもたらしたのだろうか？

重要な点のひとつが、協働先が成長段階に入る前の、代表者や中核人材の精神的な支えとなっていたことだろう。アンケートでは、約4割の団体が協働の価値としてこの点を挙げている。これに「代表者以外のスタッフ」を加えると、その割合は実に56%と半数を超える。

また協働期間を経て、パートナーが理事やアドバイザー等に就任している／していた例は38%と4割近くに上る。このことは、パートナーと協働団体との深い信頼関係を象徴していると言えよう。

■ビジネスセクターへの波及

「SVPモデル」は、ビジネスセクターにも波及を見せた。新生銀行が最初のコーポレートパートナーとなったのは2008年。SVP東京が発足してから5年目の出来事だった。翌2009年にはUBSグループが、2013年にはアクセンチュアがそれに続いた。

SVP東京のモデルをよりピュアに導入したのは三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2013年～)とパーソルHD(2015年～)、楽天(2018年～)だろう。公募や社員の声掛けによる団体募集、伴走者として手を挙げた社員による選考、チームによる伴走は、まさにビジネスセクターへのSVPモデルの導入例だったと言えよう。

SVP東京が単体でスケールを拡大させるのではなく、企業と協力し、取り組みをレプリケートする。そのことで、社会全体への波及効果を高める。20年の歴史の中盤で本格化したこれらの取り組みは、SVP東京の知見と経験、そしてエコシステムを、ビジネスセクターにスケールアウトした事象だった。

但し、これらが単なる「再現」ではなく、各社の特性に応じカスタマイズされていた事実も強調しておきたい。またモデル移転先の企業に在籍するSVP東京のパートナーや、SVPの思想と手法に共感する協力者の“内なるアントレプレナーシップ”によって実現に至ったことも、忘れず記しておきたい。こうした事実は、「SVP東京とはモデルであると共に“あり方”」であり、「育っていたのは“協働先”だけではなく“担い手”でもあった」ことの証左だからだ。

■パートナー自身の変容と、結果としての人材輩出

20年を振り返ると、SVP東京に参加したことが、人生の大きな転機につながったパートナーが少なからず存在していたことがわかる。「自ら動く」ことの重要性を認識し、ビジネスセクターでの起業や独立を果たした例、ソーシャルベンチャーを自ら立ち上げた例、協働先からの学びが後押しとなり、ソーシャルセクターに「転職」した例、社内でのキャリアチェンジを果たした例、在職先で新たな協働を実現した例など、そのパターンは多様である。パートナー卒業後、プロボノを続ける例も多い。中にはスタッフとなったケースもある。こうした「結果としての人材輩出」が、2000年代以降の日本のソーシャルセクターの成熟に与えた影響は小さくない。

そしてSVP東京の歴代の代表もまた、学びと経験を経て、それぞれに新しいチャレンジを始めていることも、見過ごしてはならない事実だろう。代表の交代は、時に痛みも伴いながら、SVP東京が育むエコシステムにその時々で異なる彩りをもたらす、可能性を広げていった。

■何が変容をもたらしたのか？

ではなぜSVP東京はパートナーの内面に深い変化をもたらしたのか？ SVP東京の何が大きく作用したのか？

ポイントは2つある。1点目は徹底した自発性である。パートナーはSVP東京に自ら年会費10万円を払い入会する。団体選考の最終局面では「なぜその団体と協働するのか」をパートナー自ら推薦人としてプレゼンテーションを行う。そして自らの意思で「Vチーム²」に入り、団体との協働を担う。つまり全ての場面において、個人の自発的なアクションと能動性が前提とされているのだ。こうして投じられた総額は1億1,700万円。歴代パートナー423人の拠出を主として構成された額だと

思うと、積み重ねられた自発性の重さを殊更を感じる。

2点目は「2年間」という、比較的長期のコミットメントである。パートナーは協働先の組織運営や事業上の課題に触れ、自らの知恵と経験を最大限に活用して解決を目指す。その過程を通じて、自らの資質や特性、スキルを再認識する。また多様な価値観に触れ、社会課題を知り、時には自らの限界や不足を知る。こうした協働先とパートナー、そしてパートナー同士の相互作用が、知らぬ間に築いていた自らの固定観念を揺さぶり、自身に内在する欲求を刺激し、自然と自己変容が促される環境が育まれているのだろう。

■「道場」であり「コモンズ」

SVP東京は2つのミッションを持つ。1つは協働先の成長を通じた社会的インパクトの創出、もう一つはパートナーの学びや成長に向けた「道場」としての役割の提供だ。「道場」という言葉には、自分と向き合い、スキルを磨くニュアンスが含まれているのだろう。

しかし筆者には、SVP東京が20年という歳月をかけ、結果として育んできたのは、ある種のコモンズだったように感じられる。

パートナーは、自らのリソースを持ち寄り。コモンズでは協働先の成長や社会的インパクトという「実り」をともに喜び、春になればまた新たな種を蒔く。新たにコモンズを訪れる者もいれば、次の場所に旅立つ者もいる。Vチームではなく、SVP東京の運営に携わることで、コモンズそのもののメンテナンスに勤む者もいる。そして時々集まり、変化や心情を語り合う。こうした営みの中で、大切にしたい価値観や暗黙のルールがコモンセンスとして育まれていく。象徴的には、協働先に対するリスペクトや自らのコミットメントを前提とする文化、多様な価値観に対する寛容性などが挙げられるだろう。

■変わらぬミッションを、そして進化を

20年の時を経て、SVP東京はどこに向かうのか。アンケートやインタビューでは、変化を求める声も、「そのまま」³という声も聞かれた。おそらくどちらも正しいのだろう。

重要なことは、コモンセンスを大切にすること、そして育まれたコモンズをメンテナンスし続けることではないか。“How”を変えても、そのスタンスが変わらなければ、SVP東京はSVP東京らしく、進化し続けるのだろうから。

水谷 衣里(Mizutani Eri)／株式会社風とつばさ 代表取締役

民間公益活動や企業の社会貢献活動に関する調査研究・政策立案・コンサルティングを主業とする。SVP東京にはこれまで、日米ソーシャルファイナンスフォーラムや15周年イベントの登壇等の場面で協力。三菱UFJリサーチ&コンサルティング在籍中には、企業側として連携プログラムの実現を支えた。また本誌の発行にあたっては、パートナーが主体となって行われた冊子作成をサポートした。

1 なお現在は米国だけで17都市、世界全体では6か国・30都市に広がりをみせている。

2 「Vチーム」とは、採択された団体との協働に際し、SVP東京のパートナーが参加するチームのことを指す。

20年を超えて、未来へ

投資・協働先団体へのアンケート調査の自由記述から、今後、SVP東京に期待することを抜粋しました。
つながる機会、学びの場、従来とは違う協働、新しい仕組みの可能性などの声があがりました。

つながることができる機会を

- SVPと団体のつながり、他のパートナーさんとのつながりが在籍中と卒業後もあるといい。企業とのつながりをいただけたのはとてもありがたいので、そのようなスペシャルな機会が増えるといい。
- ソーシャル界隈の先輩たちとの交流機会を提供いただけるとうれしい。どこで悩み、どのように解決していったか?を知りたい。
- 20周年の会のように他の団体さんと横のつながりが作れる機会とか、自分たちの経験・ネットワークをシェアできるような機会が作れるといいですね。
- 採択団体の代表を集めたリトリート合宿。

従来とは違う協働の形を

- 協業期間終了時期に「1年延長」を打診できる制度があればうれしい。
- 一度支援を受けた団体でもフェイスが違ったり、新たなサービスであれば再チャレンジできる制度。
- 新規事業立ち上げ時に知識、経験、人脈、資金が乏しい状態で実践的な相談や助言を頂ける窓口等を作って頂けるととても有難い。

テーマを定めた学びの場を

- 社会性を重視する上で、エビデンスの可視化による事業の説明責任は各団体においてこれからさらに求められると感じます。そのため、そういったエビデンス作りの支援があると良い。
- どうすれば自分たちの活動の意義がより伝わるのか、「伝わるプレゼン」についての勉強できる場があれば。
- 助成金申請やPR、政策提言のノウハウなど、チームを超えて共通化できるマニュアルやドキュメントがSVP側に蓄積され、全協働先が横断的に利用可能な知識が溜まっていく仕組みになっていると良い。

新しい仕組みの可能性

- スタートアップの支援を地方自治体と連携してできたら。
- 国内での「コレクティブ・インパクト」の動きの活性化。特にNPO側だけではなく、セクターを超えた企業とのリレーションの構築も期待したい。他中間支援組織とは違ってSVPメンバーだからこそ、ソーシャルセクター・ビジネスセクターとのつながりを創出してコレクティブ・インパクトのオリジナル版ができるのではないか。
- SVPIはインパクトファンドをやったら良いのではないかと。そこで利益を出して専従職員を雇用しながら、助成金部門もやって、というダブルトラックで進めていくのが良いのでは。
- 休眠預金の分配団体になって必要な団体にしっかり成果が出せるように伴走いただけるとより社会的インパクトが出せると思います。
- いまは、SVPにそれぞれの団体が応募する形ですが、逆があっても面白いと思います。例えば、SVPのメンバーのなかで議論して、協働したい団体に、SVPメンバーのほうからアプローチする、とか。
- SVP東京ではなくSVP Japanが良いのではないかと。応募当初、私たちが地方の組織には難しいかとも思いましたが、皆さんが支援されているのは東京だけではないので、もう一つ上のレイヤーに名称を変更するタイミングもきているのでは？

これからのSVP東京に期待することを、3代の元代表に聞きました



井上 英之 創業代表

今あるSVP東京のモデルは決定版でも何でもないので、もっともっと自由にやっちゃっていいのではないかと思います。みんなが、この場を大切な実験場として使って欲しいですね。このメンバーで一番狂ったアイデアをみんなで選んで立ち上げてみるのか？ アメリカのSVPは、とうの昔にVチーム制度を止めていますし。これまで続けてきたSVP東京にとって、何が大切なことなのか？ 東京は道場と言う言葉を好む人が多いですが、それはどういうことなのか。その大切なことを、コモンズとして、体現し、表現し続けるためには、いろいろ実験をしてみても良いのではないかと思います。ぼくは、デモクラシーのいち表現だと思って、SVPを立ち上げていました。そうやって、元気な個人と、元気な場、魅力あるコモンズが続いていけばいいと思います。

岡本 拓也 2代目代表

今でこそ、「コレクティブ」とか「越境」という言葉になっていますが、当時はまだそういう言葉はなくて、SVPは「支援」じゃなくて「協働」なんだという精神はずっとあったと思います。人を育むとか、エコシステムを作るとか、その土壌を耕す存在になっているんじゃないか。その土壌をこれからもみんなで耕し続けようというのが、SVPのメッセージとしてはいいなあと思います。パートナーの成長が世の中のムーブメントをいろいろな立場で作っていると思うので、パートナーというものの定義の拡張ということと、団体との協働やお金の出し方の多様性みたいなことは今後5年、10年でいろいろチャレンジしてみると、10年経ったときに面白いことできたね、となる気がします。

藤村 隆 3代目代表

あまり変わらないでいてほしいかな…。インパクト投資とか、企業連携とか、いろいろな流れもあり変化に対する圧力はいつもあるのだと思いますが、長く続けているがゆえの価値はあると思います。アメリカのSVPでも、ものすごく変化していく支部と、変わらず価値を出している支部があって、どちらが正しいということでもないと思っています。パートナーも5年、10年経ってくると、投資協働の活動から価値を得ていると答える人は少なくなって、自分たちが新しいことにチャレンジしたときにまず相談できたり、応援してもらえるこのコミュニティが重要だと言います。パートナーが実際に行動を始めて仲間ができて自分の人生をまた形作っていく、行動変容がかなりの確率で起こっているのを感じたときにパートナーでいることの意味はそこにあると改めて感じました。

SVP20周年特設サイト

<https://svptokyo.org/20th-anniversary/>



コンテンツ紹介

協働団体インタビュー・シリーズ

NPO法人風テラス 坂爪真吾代表

認定NPO法人ピッコラーレ 中島かおり代表

認定NPO法人ReBit 薬師実芳代表

株式会社ローランズ 福寿満希代表

株式会社AsMama 甲田恵子代表

NPO法人チャリティーサンタ 清輔夏輝代表

NPO法人バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター(BBED)

玉田雅己代表・玉田さとみ事業統括ディレクター

NPO法人ユアフィールドつくば(つくばアグリチャレンジ)

伊藤文弥代表

20周年イベント情報の紹介

協働先・パートナー20周年アンケート調査結果

P10~P21で紹介したアンケート結果全編を掲載していますので、ご一読を!



SPECIAL THANKS

20周年企画にあたり、

ロゴマーク、記念ステッカーや本冊子にはフォントを使用させていただいた協働先のシブヤフォントさま
本冊子の企画制作に尽力いただいた水谷衣里さま
デザインを引き受けていただいた木村百合子さま、特設サイトを制作いただいた竹花和郎さま

設立からこれまでお世話になっている、

歴代の投資・協働先団体のみなさま

毎年の投資・協働先募集に応募いただいた数多くの団体のみなさま

85回を数えるネットワークミーティングなど各種イベントに参加いただいたみなさま

新生銀行、UBSグループ、アクセンチュア、三菱UFJリサーチコンサルティング、パーソルHD、楽天など
ご支援いただいた企業関係者のみなさま

NPO法人監事をお引き受けいただいた大毅さま、久保田克彦さま、加藤俊也さま、吉村祐一さま

オフィスをお借りしたSHIBAURA HOUSEを始めとして多くの会場施設、
ウェブサイト運営、会計など、SVP東京の活動基盤を支えていただいたみなさま

SVP Internationalのみなさま

そして、歴代のパートナーのみなさま

20周年記念のこの機会に深く御礼申し上げますと共に、未来に向けて今後ともよろしくお願ひ致します。

編集後記

「来年(2023年)、20周年に何をしようか?」という話が
始まったのは、2022年5月。
当初から、【20年の成果をまとめて形にする】という思い
はあったものの、「ホントにやるのか?大変だぞ!」と自問
自答しつつ、「宣言してしまって、自分を追い込まないと、
絶対にやらない(笑)」ということも確信があり、宣言して
しまうことにしました。(苦笑)
それから2年あまり、やはり大変でした。(当初の予定だと、
この冊子は数ヶ月前に完成していたはずでした・・・)
それでも、Special Thanksページに列挙させていただいた
みなさまのおかげで、SVP東京にとっては積年の課題
だったことが形になり、肩の荷が下りる思いです。同時に、
イベントのお誘い、アンケートへの回答お願い、この冊子
の原稿確認のお願いなどで、歴代の協働先のみなさま
とつながり直す機会ができたことに感謝しています。
すべて含んで、ありがとうございました!!

2008年入会 神代伸一

2016年に入会して、いつの間にか古株と言われる方にな
ってきました。自分が生きている世界の裏側に、こんな
にも多様な社会課題が渦巻いていて、またそこに果敢
にも立ち向かっている人たちがいる・・・そのことに衝撃
を受け、気づけばどっぷりとSVP東京の活動にはまってい
ました。入会費が高いか低いかという議論がありますが、恐らく自分ほどレバレッジを利かせて色々な学びを
得て、楽しんで、自分の人生にも活かしているパートナー
はいないのではないかとと思っています。
それをいかに他のパートナー(もしくは候補者)に伝え
れば良いのかと常に考えていたところ、このプロジェクト
の案が持ち上がり、これでやっと自分が感じていることを
形にして人に伝えられる!と歡喜しました。「なんであなた
たちはこんなことをしているの?」と聞かれたとき、これからはこの冊子を示して、多少なりわたしたちの活動の価値
を感じていただければこの上ない幸せです。

2016年入会 てきさす(桐ヶ谷)

SVPの足跡や成しえてきたことをまとめる、というのは
長らく課題となってきたことで、今までにも色々な試み
がありましたが、SVPの協働における多くの課題は中長期
的な目標をもったものであることから、なかなか形に
できてきませんでした。
そんな中、今までSVPに関わってくださった多くの協働
先とパートナーの協力があって、立ち上げから現在まで
のSVPの一連の活動と、SVPの価値を振り返ることの
できる20周年記念の冊子を作成することができました。
この冊子を作れたこと自体が、SVPのすばらしいコミュニ
ティの現れだと、20周年関連のイベントや制作を通して、
最も強く感じたことでした。
今後、SVPがどのように変化していくかわかりませんが、
これまで少しでもSVPに関わってくださった皆様、今後
ともどうぞよろしくお願ひいたします!そして、さらに多くの
方と未来のSVPを作っていけますように。

2017年入会 戸田有美(ベス)

2012年UBS在籍時に当時のSVP企業プログラムに
参加し、2017年に当時の代表の藤村さんとお話して、
2018年からパートナーとして活動しています。激務のなか、
自分を普段と違う場所に置き、知らない方々と協働、普段
関わらない社会的課題に直面しているエネルギー
な団体と活動したらどう変容するかな、という好奇心で
した。おかげで沢山の仲間が増え、いくつかの団体とも
時に大変ですがしっかり協働できています。志願して
20周年プロジェクトに参加したのは、関わる機会
のなかった過去の団体やパートナーとの共創機会が生ま
れると想像しながら、やはり気軽な好奇心からでした。
実際に学び、発見、繋がり直しが盛りだくさんなプロ
ジェクトを終え、確信として20年間のマーケットプレイスで
育み生んだものは特別だと感じながら、仲間達とこれ
から先日本の社会に必要な価値と役割を提供する
活動だと信じています。

2018年入会 レイモンド・ウォング

投資・協働先団体 一覧



認定NPO法人多文化共生センター東京
外国にルーツを持つ子どもたちの学びを支援し、その可能性を發揮できる社会を共に目指します。
<https://tabunka.or.jp/>



認定NPO法人フローレンス
「子どもたちのために、日本を変える」事業開発、政策提言、文化創造の3つの軸で課題解決・価値創造に取り組みます。
<https://www.florence.or.jp/>



認定NPO法人発達わんぱく会
発達障がいまたはその疑いのある未就学児向けの早期療育、相談支援、他事業所の開設・運営支援
<https://www.wanpaku.org/>



NPO法人クロスフィールズ
「働く人」と「社会課題の現場」をつなぐ越境体験の提供
<https://crossfields.jp/>



NPO法人バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター(BBED)
日本手話と日本語のバイリンガル、ろう文化と聴文化のバイカルチュラルな教育の提供
<https://www.bbед.org/index.html>



NPO法人マドレボニータ
「産後ケア」を起点にすべての家族が健やかに子育てをスタートできる社会を目指して
<https://www.madrebunita.com/>



株式会社U2plus
うつ予防・回復をサポート、みんなでやる認知行動療法
<http://u2plus.jp/>



NPO法人ArrowArrow
仕事か子育ての「どちらか」ではなく、「どちらも」。選択肢溢れる社会へ!
<https://arrowarrow.org/>



NPO法人にわたりの会
無限の可能性を持つ子どもたちを“ダブルリミテッド”にしないために
<https://www.niwatoris.org/>



一般社団法人ゆにしあ
介護者家族のための「食介護サポート」を通して、誰もが食の楽しみを忘れず、安心して暮らせる社会を目指します
<http://uni-sia.org/>



NPO法人ワールドキャンパスインターナショナル
日本の地域と世界の若者で「キャンパス」コラボレーション地域に元気を取り戻し、地球市民へ
<https://worldcampus.org>



株式会社みやじ豚 NPO法人農家のこせがれネットワーク
一次産業をカッコよくて・感動があって・稼げる3K産業にする!
<https://www.miyajibuta.com/>



株式会社キズキ(NPO法人キズキ)
何度でもやり直せる社会をつくる
<https://kizuki-corp.com/>



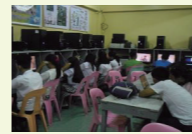
株式会社リムジカ
介護の現場に心のエネルギーになる音楽を～参加型の音楽プログラムを通じて人が最期まで自分らしく生きられる社会をつくります
<https://lirimusica.co.jp/>



NPO法人イージェイネット
「女性医師が豊かな医療の担い手になること」をゴールとして「みんなでつくる働きたい病院」認証事業を行っています。
<https://ejnet.jp>



NPO法人ガイア・イニシアティブ
ガイア・ヴィレッジ/ソーラーランタンプロジェクト
<http://www.gaiainitiative.org/>



認定NPO法人e-Education
途上国をはじめとした学習環境に恵まれない子どもたちに、ICTの力を駆使して教育を届ける。
<https://eedu.jp/index.html>



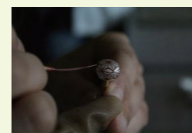
NPO法人ハナラボ
社会課題の解決を通じて、女子学生の創造力とリーダーシップを育む
<https://hanalabs.net/>



認定NPO法人カタリバ
どんな環境に生まれ育った10代も、未来を自らつくりだす意欲と創造性を育める社会を目指す
<https://www.katariba.or.jp>



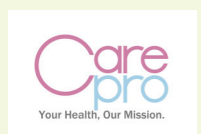
株式会社プラスリジョン
農産物や農法だけじゃない人の生態系もオーガニックへ。障害を“ある”から“ない”へ変える挑戦は畑から食卓までのオーガニックの中で自然とあることを目指します。
<http://www.plusligion.com/>



株式会社KARAFURU
伝統工芸技術や文化を継承・啓蒙し、文化的に豊かな日本社会を守り続けるために
<https://www.karafuru.jp>



NPO法人ミャンマーファミリー・クリニックと菜園の会
ミャンマー人のミャンマー人によるミャンマー人のための自立(自律)した社会の実現へ～10年計画:Beyond Community・民族も宗教も超えた人間としての繋がりを～
<https://mfcg.or.jp/>



ケアプロ株式会社
健康チェックやスポーツ救護、民間救急などを展開
<https://carepro.co.jp/>



認定NPO法人難民支援協会(JAR)
難民のためのマイクロファイナンスと起業サポート機関の立ち上げ
<https://www.refugee.or.jp/>
<https://espre.org/>



NPO法人みんなのこぼ
五感を使い、心を育てる“本物の体験”をすべての子どもたちへ。
<https://minkoto.org/>



NPO法人ふるするは
親の精神障がいなど大人の様々な事情の中で、頑張っている子どもたちを応援しています
<https://pulusualuha.or.jp/>



NPO法人コレクティブハウジング社
共に暮らし自治するコミュニティ“コレクティブハウジング”を推進しています
<https://chc.or.jp/>



NPO法人ブラストビート
「音楽×起業×社会貢献」で、チャレンジする10代を増やします!
<https://blastbeat.jp/>



認定NPO法人ReBit
LGBTQもありのまま未来を選択できる社会をつくる
<https://rebitlgbt.org>



NPO法人チャリティーサンタ
「子どもたちに愛された記憶」を残すため「大人たちが手を取り合う社会」をめざします
<https://www.charity-santa.com/>



コペルニク
途上国の社会・環境課題について、効果的な解決策を見つけ、普及させることに取り組んでいます。
<https://kopernik.info/jp>



NPO法人きずなメール・プロジェクト
テキストメッセージ「きずなメール」で孤育て(孤独な子育て)を防ぐ。
<https://www.kizunamail.com/>



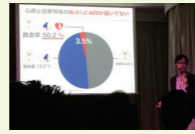
株式会社AsMama
一人ひとりが思い通りに社会参画できる共助インフラの普及を、多企業・多団体との連携により目指す
<https://asmama.jp/>



株式会社/一般社団法人ピリカ
科学技術の力であらゆる環境問題を克服することを目指しています。まずはごみの自然界流出問題から!
<https://corp.pirika.org/>



**NPO法人ユアフィールドつくば
(つくばアグリチャレンジ)**
太陽のもと、ともに暮らし、働き、遊び、育み合う豊かな社会
<https://yf-tsukuba.com/>



Coaido株式会社
ITとデザインの手で、
当たり前で心停止者の命が助かる未来を作る
(事業終了)



株式会社ローランズ
「みんなみんなみんな咲け」と願いを込め
障害者雇用の新しい仕組みで人々を花咲かせる
<https://lorans.jp/>



NPO法人サンカクシャ
虐待などの影響により、
親を頼れない15歳から25歳くらいまでの若者に対して
「居場所」「住まい」「仕事」の3つのサポートを提供
<https://www.sankakusha.or.jp/>



NPO法人患者スピーカーバンク
患者の「語り(ストーリーテリング)」で、
社会に気づきを届ける
<https://npoksb.org>



スリール株式会社
自分らしい、ワーク&ライフの実現へ
<https://sourire-heart.com/>



NPO法人ピルコン
人生をデザインするため、性を学ぼう
<https://pilcon.org/>



NPO法人風テラス
「風テラス」の法的・福祉的支援を通じて、性風俗で
働く女性たちに、安心と未来への選択肢を提供したい
<https://futeras.org/>



NPO法人CHAR(モクテン企画)
不動産ストックの活用を通じ、
つながりを育むまち・社会を実現する
<https://www.studiochar.jp/>



認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい
「経済的な貧困」と「つながりの貧困」の両方に対応し、
貧困問題を社会的に解決する
<https://www.npomoyai.or.jp/>



株式会社おてつたび
「どこそこ?」と言われてしまいがちな日本の各地域に
人が来る仕組みづくりを行うマッチングプラットフォーム
<https://otetsutabi.com>



株式会社イノP(農家ハンター)
農家ハンター ～地域と畑は自分たちで守る～
<https://farmer-hunter.com/>



SEELS株式会社
Uplift the Lives and Transforming the Image
of Filipinos in Japan.
<https://seels.co.jp/>



NPO法人PIECES
子どもの周りに「信頼できる他者」を増やすことで、
孤立することなく生きられる環境づくりに取り組む
<https://www.pieces.tokyo>



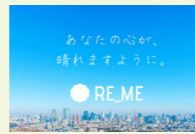
一般社団法人シブヤフォント
シブヤフォントは障がいのある人とデザイナー・学生による
共創デザインを日本中・世界中に広げ、福祉還元と
共生社会の実現を目指しています。
<https://www.shibuyafont.jp/>



mog株式会社
「全ての子どもの食を楽しめる社会」の創出に向け、
食べない子の支援情報発信とサポートの提供
<https://www.kodomo-mog.jp/>
<https://www.hug-mog.jp/>



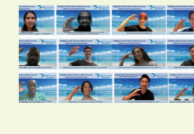
認定NPO法人3keys
すべての子どもたちにセーフティネットを
<https://3keys.jp/>



株式会社リミー
心の健康をすべての人に。メンタルヘルスの
専門家への手軽なアクセスを実現します。
<https://reme-nomal.com/>



NPO法人ソソリッサ
「ひとりでは抱えずに優しいつながりが溢れる社会をつくる」を
ビジョンに掲げ、高齢者の孤立・孤独の解消を目指す。
<https://sonrisa-npo.com/>



一般社団法人Robo Co-op
誰もがありのままに輝ける未来へ～性別や国籍を問わず
多様な人財と互いに支えあい、デジタルスキルの
トレーニングや就労機会を広げていきます～
<https://roboco-op.org/>



株式会社ココッキング
すべての「食べて」を食べ手につなぐ。フードロス削減
ムーブメントの発信源になる、社会派アプリサービスです。
<https://www.cocooking.co.jp>



認定NPO法人ピッコラーレ
「にんしん」をきっかけに、誰もが孤立することなく、
自由に幸せに生きることができる社会の実現を目指します。
<https://piccolare.org>
<https://nsost.jp>



阿波ソクヨミファーム(株式会社経親)
リジェネラティブ(環境再生型)農業×「半農半X」=
誰も諦める必要のない社会、誰もが挑戦し続けられる社会
<https://awatsukuyomi.com/>



合同会社Renovate Japan
人生も空き家も日本社会もタテナオン
～JapanをRenovateするソーシャルビジネス～
<https://www.renovatejapan.com>



NPO法人エイズ孤児支援NGO・PLAS
アフリカで取り残された子どもたちが、
前向きに生きられる社会を目指す
<https://www.plas-aids.org/>



一般社団法人グッドネイバーズカンパニー
「ヘルスケアからプレイフルケアへ」もっと参加型で、
もっと創造的な地域医療と保健活動をめざして!
<https://gnc.or.jp/>



NPO法人アジア人文文化交流促進協会(JII)
「おとなりさん」プログラムの発展で、外国人にも
日本人にも住みやすい、多様で寛容な共生社会を实践
<https://j-ii.org/>



一般社団法人家族のためのADR推進協会
「離婚しても、笑おう。」親も子どもも前を向いて
一歩踏み出すために、話し合いによる離婚をサポートします。
<https://adr-family.com/>



一般社団法人エンドオブライフ・ケア協会
専門的なこころのケアをすべての人生のそばに:
ユニバーサル・ホスピスマインド
<https://endoflifecare.or.jp/>



NPO法人WELgee
紛争や迫害から日本に逃れた難民の
人生・キャリアに伴走するNPO
<https://www.welgee.jp>



NPO法人第3の家族
家庭環境に悩む少年少女が「自分の居場所は他にもある」
と思えるように～寄り添わない支援～
<https://daisan-kazoku.com/>



テクノツール株式会社
テクノロジーによって、重度肢体不自由者の就労と
社会参加の選択肢を増やす。「できることはたくさんある」
<http://www.ttools.co.jp/>



NPO法人アクセプト・インターナショナル
テロや紛争といった「憎しみの連鎖」をほどこことを
目指す世界でも数少ない日本発の団体です。
<https://accept-int.org/>



株式会社デフサポ
「難聴者の未来を華やかに」するために、
難聴に関わる情報やことばの教材を提供しています
<https://nannchou.net/>



NPO法人メタノイア
「世界につながる子どもと社会をつなぐ」ため、
子どもの日本語教室を全国に広げます。
<https://metanoia.or.jp/>